

Voice of Design

Vol. 17-2

日本デザイン機構
Japan Institute of Design

東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F 〒171-0033
San Ai Bldg. 2F 3-30-14 Takada Toshima-ku Tokyo 171-0033 Japan
Phone: 03-5958-2155 Fax: 03-5958-2156
http://www.voice-of-design.com E-mail:info@voice-of-design.com

特集

鎮魂のデザイン



6月11日、安波山を見て津波で火の海になった気仙沼を思いスケッチ。(Voice of Designトークサロン 石山修武さんと2時間)より、本誌 p.9) / Sketch drawn on June 11 looking up at Mt. Anba imagining Kesennuma in the fire after the Tsunami. (from "Voice of Design Talk Salon Two Hours with Osamu Ishiyama" p.9)

巻頭インタビュー 鎮魂のデザイン 栄久庵憲司 日本デザイン機構会長

目次

- ・巻頭インタビュー「鎮魂のデザイン」……………1
栄久庵憲司
- ・VOICE OF DESIGN トークサロン ……………3
主旨説明 佐野邦雄
講演 石山修武
ディスカッション
閉会挨拶 水野誠一
参加者からの寄稿
- ・寄稿 櫻井広行 ……………22
- ・事務局から……………24

2011年の7月に「池中蓮華」という展覧会をされました。3月の大震災と、深いつながりがあると思いますが—

栄久庵憲司：池中蓮華は見えないものを形にしようと思ったのです。中国には見えないものの中に形があるという論があります。三千年前に老子が言っています。

また、孔子は「己の欲せざるものは人

に施すべからず」と言いました。まさにデザインの本筋です。

3月の震災の時にNPOなどがいろいろと良いことをやって大変良かったと思うし、世界でも評価されているけれど、しかし己の欲せざるものを施すなかれと言ってピタッとしているかどうか分からない。難しいところがあります。押しつけど、せつかくの親切だから断るわけにはいかないとか、これはまったく意味

Contents

- ・ Special Interview with JD Chairperson ---1
Kenji EKUAN
- ・ Voice of Design Talk Salon -----3
"Architect in Action: Two Hours
with Osamu ISHIYAMA"
Talk Show : Kunio SANO
Lecture: The Present Time as I See it
Discussion
Closing Remarks : Seiichi MIZUNO
Comments from Audience
- ・ Contribution-----22
Hiroyuki SAKURAI
- ・ From the Secretariat -----24

Special Interview with JD Chairperson Kenji EKUAN

You organized the "Chichu Lenge (Lotus Flowers in a Pond)" exhibition in July 2011. It appears the exhibition has some association with the great earthquake in March. *

Kenji EKUAN: I intended to give shape to invisible matters in the "Chichu Lenge" (Lotus Flowers in a Pond) exhibition. An ancient Chinese philosopher, Lao-tse, said 3000 years ago that invisible things have also shapes. Another Chinese philosopher, Confucius, said "Do not give others what you do not want yourself." Here is the essence of design. Even for the disaster relief in the Tohoku district, we should be careful not to give things to the affected people that we do not want ourselves. If you think about things in this way, then, you may stop to consider what you really want. After that, you will look at the reality, and proceed to repairing the existing things, or identifying new needs.

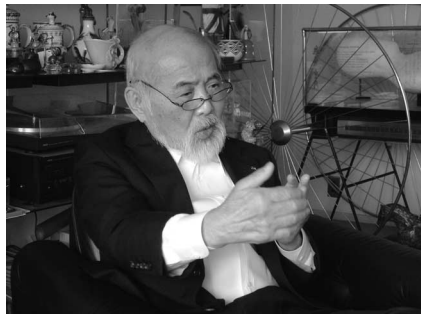
Local characteristics are highly appreciated in Japan. The distinguished characteristic of people in the Tohoku district is being patient. Their patience is demonstrated in manufacturing precision instruments, above all, the most difficult automobile parts. People who are unable persevere with difficult work until they are finished cannot manufacture these

巻頭インタビュー 鎮魂のデザイン

がないとか、結構あると思う。そういう点で東北の震災でも、己の欲せざるものを人に施すなかれということを考える。そうすると己の欲するものは何かということを考えるのです。そうすることで現状を考えるようになり、まずいものがあれば直したり、今まで経験のなかった新しいものを探そうになります。

日本の場合、地域性が非常に重要で、盆地のような所に溜まり固まり集中します。東北もそれが有り我慢強い。その東北の我慢強さが何に表れたかという精密機械です。小さな精密機械、しかも自動車の部品でも最も難しいところ。それは耐える力がないとできないそうです。それが被災して日本の自動車が世界に供給できなくなって大変困った。あの寒いところでジーンと我慢している、東北の人の我慢強さ、その力は凄い。それを再発見したと思います。

今の日本国が少しだらしなくなっているのを、今度の地震という大事件が呼び覚ました。東北は日本の1/6くらいあります。1/6がだめになるということは全国がダメになることと同じです。あの事件は東北人にとっては大変苦しい、何百万人もの苦しみです。そこで初めて日本人の目覚めのきっかけになった。それに対して、いったいどのように立ち直るのかというと、本当は外の力がいます。政府の力、それから一般の力も必要です。人の噂も75日ではだめです。下手をすると、リーダーがいらないから、人の噂の75日になってしまいそうで。参考になるの



栄久庵憲司JD会長 / Kenji Ekuian JD Chairperson

は阪神の大地震、17年経ったら誰も忘れてます。そんなこともあったけど。人は生きたら必ず亡くなる。20年もすると、今の中年の連中はみんな死ぬ。20年なんてあっという間です。

そういう意味で、この東北大事件は日本人の精神のポテンシャルを高めることを、あれだけの人たちが犠牲になって、「君等がしっかりせよ」と言われたのだと思う。誰も好き好んで犠牲になったわけではないけれど、あちらの角度から見ると自分はそうして、教を全国に知らせて、そしてしっかりしなさいと言ったのではないかと思うのです。

戦後60年間なにをやってきたかということ、本当に考えなければいけない。それを一人ひとりが自分自身の中で反省するのは難しいことですが、日本の1/6ではなく、日本国が全部崩れたと言ってもいいくらいな事件で、自然というのはしょうがないし、人のわざの行き届くところではない、ということです。それも自然からではなく、天から与えられた天命。孔子の昔から自然の上に天があり、

天と地の間に神があった。神の上に天があった。だから東北の事件は天の知らしめるところだった。良い悪い善悪じゃない。人間にとってはひどい悪だけれど、自然から見れば一つの事象だ。やはり天命に近い。天命は形がない。形になったのが地震とか津波なのです。

僕は文学とデザインをどうしても結びつけたい。文学は、非常に精神変化の深いところ、外国だったらファウスト、日本だったら近松にある。綺麗な言葉で、形のないものを形にしている。特にこれからのデザインは形のないものを形にする世界でしょう。例えばユニバーサルデザインは親切を形にしたものです。それからもっと心のひだをさすってあげられるような、そういう親切をどう形化するか。高齢化社会がもうきているし、特に最近では「孤独死」。あり得ること。そこで、面倒を見る種族をつくっていかねければいけない。それを真剣に、全般的に考えるようになったのがあの事件。あれが「生きるとはなんだ」ということを教えているのだと思います。

整理の時期なのかかもしれない。整理してちゃんになるのではなくて、整理して一歩飛び上がらないといけない。そこが大事だと思います。

(2012.1.18 インタビュー：佐野邦雄、迫田幸雄(本誌編集委員長)、南條あゆみ)

precision parts. We discovered this fact anew after the disaster. The Tohoku district occupies about one sixth of the total area of the country. When this size of area is damaged, the country as a whole is also severely damaged. Millions of people in the affected area are going through difficulty in living. To help them regain their footing, external help from the government and the public is required. Indeed, the earthquake made us realize that the Japanese had become dispirited these days. With the great number of victims, the great earthquake has urged us to be awake. The work of nature is beyond human power. Earthquakes and tsunami can be causes of disaster to humans, but they are just natural phenomena, or acts of Providence. Designers should give shape to invisible things. Universal design, for example, is the materialization of kindness. As the number of elderly people is on the rise, we have to consider ways to develop caring communities. How can we give shape to such care? We

should see the earthquake as a trigger to change our thinking to consider "what kind of life we should be living." (interview by Kunio Sano, Yukio Sakoda, Ayumi Nanjo on January 18, 2012)

Repose of the victims

One of the seven principles for post-earthquake rehabilitation set forth by the governmental Reconstruction Conference in June 2011 was the "eulogy and repose of victims' soul" as the starting point of our efforts to rehabilitate the affected region. Spiritual interaction between the deceased and survivors is valued among people. This mindset of individuals is reflected in the efforts of public authorities.

From time to time, throughout our history, the Japanese nation has undergone outrageous natural disasters. We should accept our fate and consider what we should do for now and the future. At the beginning is the repose of the victims. (Kunio Sano)

「鎮魂」について

2011年3月11日、東日本大震災の津波はすべての人工物を瓦礫と化し、それを築いた文明と、そこにあった濃密な文化と、そして尊い生命を奪い去った。

6月に発表された政府の復興構想会議の復興構想7原則の1には「失われたおびただしい「いのち」への追悼と鎮魂こそ、私たち生き残ったものにとって復興の起点である。――とある。しかし、多くの人は繰り返しを予感しつつも、とりあえず復旧・復興の具体に走る。生活があるからだ。

「鎮魂」は中国から伝わった言葉だ。鎮庄、鎮撫のように鎮のつく言葉には力の歴史と公のイメージが強い。しかし、日本では死者と生き残った者の個人と個人の心のやりとりが中心にあり、それがそのまま普遍性を持ち公に繋がるという日本文化の仕組みの特徴を備えている。

阪神・淡路大震災の後、小松左京氏は「それが「地震列島」「災害列島」と呼ばれる日本列島の上に、数千年にわたって社会を形成して来た私たちの国の特性の一つなのだ。「穏やかな日常」の下に、時折突如として姿を現す「凶暴な非日常」が潜んでいる事も、私たちの生活を展開する「地球という自然」の基本的性格なのである。――と新聞に書いている。今が、現実を受け入れ、深化と未来のために考える機会であることに違いはない。その第一歩は深い「鎮魂」だ。(佐野邦雄)

VOICE OF DESIGN トークサロン

第一回 行動する建築家・石山修武さんと2時間

期日：2011年11月17日（木） 会場：アルカディア市ヶ谷私学会館（東京）

主旨説明

進行 佐野邦雄 日本デザイン機構監事

今日新しくスタートする「ボイスオブデザイントークサロン」のタイトルは「今の」共有です。3月11日以降、皆様一人ひとりが昨年とは全く違う「今」を感じていると思います。東日本大震災、原発事故、先の見えない経済など激動の社会の中で、「今」そのものが新しく意味を持っているのではないかと考えました。後世、あの時から変わったと言われるであろう「あの時」に今、私たちはいるわけです。このトークサロンは毎回様々な領域で活躍している方にお出でいただき、一人の人間として市民として専門家として、今何を感じ考え、これから何をやろうとしているかを率直にお話いただき、会場の皆様とのやり取りを通じて、互いに確認したり深める場を持つとするものです。

今日は石山修武さんをお迎えしました。肩書きに「行動する建築家」と勝手につけさせていただきました。石山さんは東奔西走そのものの人です。そして、対象を常に個人の問題として捉え、そこを起点に動きまわり、堅く言えば人間の全体性の獲得を、柔らかく言えば「ああ、

人間やっているな」の人です。

今、社会は千年に一度の災害に立ち会って、外から強制される他律的な状況にあります。「頑張りよう日本」のかけ声で国民の気持ちは一つになっているかに見えますが、逆に言えば個や個人が見えにくくなっています。そうした中でもご自分のやり方を貫いている石山さんを見ると、むしろ今のクリエイターの役割を果たしているのではないかと思わせるのです。

石山さんは阪神・淡路大震災の時に「ライト・インフラストラクチャー」を提示しました。それから「開放系技術」をずっと提言しています。個人のため、個人による個人の技術というのがある、そこをスタートに考えようということだと思います。かつて日本デザイン機構のテーマ「防災」では「僕らのやることは確実にある」として、紙製の座れるトイレを製作したこともあります。

石山さんは長いこと東北の人びとと共に歩んで来ました。そして今回先ず、三陸海岸被災者支援絵葉書プロジェクトを立ち上げました。石山さんが描いた絵を絵葉書にして販売し、その収益を支援金として壊滅的に被害を受けた気仙沼や唐桑の人びとに直接渡すものです。それでは先ず1時間ほどお話いただきます。

Talk Salon: Introduction

Facilitator :Kunio SANO, JD auditor, industrial designer

After the great earthquake in March 2011, many of you may be thinking differently from how had been thinking before. We, at the Japan Institute of Design have planned a series of talks called JD Talk Salon. In this series, we are inviting people actively engaged in different fields to speak about their activities, areas of specialization, and their thoughts. After their speeches, we would like to deepen our thoughts through interaction between the speakers and audience.

Today, we invited Osamu Ishiyama. We took the liberty of giving this session the title of "Architect in Action." He is literally an architect on the move. He always puts emphasis on the process of designing by having thorough discussions with clients, and

embodies the result of that interaction in the finished works. He seeks to exercise the rights to live and create, but to me, he appears to be acting in an unconstrained manner without being swayed by given conditions.

Now, in the face of the worst disaster in a millennium, we are in a heteronomous situation in which our lives are severely affected by external conditions. Under the phrase of "Gambaro Nippon, (Hang in, Japan)" people's minds appear to be united. But in contrast, individual thoughts and activities tend to be hardly noticed. Looking at Ishiyama-san persistently doing things his way, I consider him to be performing his role well as a creator of today. He has long been associated with people in the affected area, and now he sells postcards on which his paintings are printed and the proceeds will be donated to people there.

講演 見えてきた「今」

石山修武 建築家、早稲田大学建築学科教授、日本デザイン機構理事

昇れば下る 映像を見ながら、さっそく本題に入りたく思います。

今度の大地震に遭いました岩手県の一関でジャズ喫茶をやっている私の友人の男の店は、モダンジャズをレコードで真空管のアンプで、世界で一番いいといわれるアメリカのJBLの50年前のスピーカーで神話のない音を出すというので日本では非常に有名です。それをどこから聞きつけて、数年前にJBLの社長が来て、すぐには帰らず聞き続けて2日も3日も泊まって、これは本当にうちのスピーカーなのか、こんな音が出るのかという感慨を抱いて帰国。店主に、ニューヨークの自分の家までどうしても来いと招いて、カリフォルニアにあるJBLの工場まで行ってアドバイスを求めた。今でも世界の超一流の名プレイヤーや、若いプレイヤーがここに来て、1950、60年代の音を聞いてモダンジャズってこんなに凄い音を出しているのかという感慨を漏らして帰っていく。不思議な時代だと思います。友人は、こういうオーディオ機器、スピーカー、あらゆる音を出す機械、録音技師と技術、テクノロジーはだいたい1950年代にピークを迎え、1960年代に花開いて、それからずっと下り坂だという。ある種の分野では1950年代にピークを迎え、それから下り坂に、デザインとは言いませんが、かなりの分野でそう

なっているのではと思います。それをしっかり認識しないと、いつまでも前進できるという甘い考えではあらゆることに失敗するのではと、しきりに思うことがございます。

祈りのデザイン 私の仕事は日本を中心に、アジアなどに少し展開を始めております。仕事というには不思議な、一つの建物づくりの話から入ります。Fig.1はチベットに発し中国からインドシナ半島を縦断するアジアの母なる大河メコンと、上流にアンコールワット遺跡があるトンレサップ河の合流点、カンボジアの首都プノンベンです。昔から大切な聖地で、王宮シルバーパゴダが、その隣にカンボジア最大の小乗仏教の中心地、ウナロム寺院があります。カンボジアでは知る人ぞ知る、プノンベン市民を300万から500万人大量虐殺したポル・ポトの時代、この寺の本殿が実は司令部だった。それくらいここは地政学的に地の利がいいカンボジアのど真ん中です。その境内の小さい場所に広島市民の皆さんと一緒に10年くらいかけて、今までのデザインや建設とは全く違うやり方で「ひろしまハウス」を建てることができました。特にカンボジアは今軍事独裁政権で、平和ぼけしている日本人がこういう国に建築したりするとすぐ没収されます。それで



Fig.1



Fig.2

Fig.1 メコン河とトンレサップ河の合流点にプノンベンがある
Hiroshima House is located at the point where two rivers intersect.
Fig.2 ポル・ポトの大量虐殺
Pol Pot's killing field



Fig.3



Fig.4

Fig.3 世界中の人々によるビルディング・トゥギャザー
"Building Together" by people from all over the world
Fig.4 ひろしまハウスの仏定
Hiroshima House: Buddha's feet

Lecture: The Present Time as I See it

Osamu ISHIYAMA, architect, professor of architecture at Waseda University, JD director

* What goes up must come down.

This is a café run by a friend of mine in Ichinoseki in Iwate prefecture Tohoku. He plays modern jazz records on a vacuum-tube amplifier using a 50-year old JBL speaker made in the United States. Among fans in Japan this speaker is legendary for producing good sound. According to my friend, audio equipment and recording techniques reached their peak in the 1950s and 1960s, after which they have declined. This thought may be applicable to other technologies as well. We should be more conscious that advancements do not necessarily make improvements.

* Design of Prayer

I work based in Japan, but I began to expand the area of my activities to Asia a few decades ago. Fig. 1 shows Phnom Penh, the capital city of Cambodia in which Unarom Temple, the center of Theravada Buddhism is located next to the Palace. During the time of Pol Pot who is said to have massacred 3 to 5 million people, the main building of this temple was used as his headquarters. On a small site within the compound, together with people from Hiroshima and other areas, I helped with the building of Hiroshima House. It took nearly ten years to complete as the designing and building processes were unconventional.

The reason for my involvement in this project is this. Several hundred thousand people died in Hiroshima by the explosion of an atomic bomb in 1945. When people in Hiroshima learned of the mass massacre carried out by the Pol Pot regime, they grieved over

一番安全なのは寺院の境内です。ここは誰にも没収されない治外法権になっています。

なぜつくることになったかという、広島も戦争の最後にアメリカに原爆を落とされて、数十万人の方が亡くなっております。それで、広島の方々がポル・ポト政権の虐殺を知って、非常に胸を痛められた。一方、原爆ドームとか広島のパースセンターに小学生その他が修学旅行にきてテーマパークを見るようにはしゃぎ回って見る。それで基本的に平和の意味などを分かっていないという感慨を漏らされて、それなら非常に困難な国に行き、もう一つ原爆ドームのようなものをつくらうということになりました。それで、なぜか私が引っぱりだされて、そのプロジェクトのお手伝いをした。そういうことを確実に思い起こさせる役割を一つの建築でできるのではないかと始めた仕事です。

この10年くらいカンボジアに通い、広島市民の方あるいは世界各地からの若い学生さん達やいろいろな方々が手伝い、参加しましたけれども、やはり皆さん現場に行きますと初日は観光旅行、お土産を買いに行ったり日本の消費生活にどっぷり浸かっているのがなかなか消えませんけれども、大量虐殺で髑髏がたくさん積みまれているところを見てようやく何かを感じてくださるということが、10年に渡って多々あった気がいたします (Fig.2)。

Fig.3は建設現場です。ドイツその他、

第二次世界大戦で負けた国の若い人たちがよく手伝ってくれました。アメリカは原爆を落としたのがなぜ悪いと、来ませんでした。それはそれで立派だとは思いました。「ひろしまハウス」をどんな建て方をしたかと言うと、ボランティアの人たちが一つずつこのレンガを積んで帰っていく。僕もこの現場を始めた頃は、これは完成しないだろうと思ったのですが、これが延々と続き、やはり皆さんの中に、一つの時代の未来を見たいという非常に善良な、本当にナイーブな気持ちがどこかに残っているのだと思います。それで10年間続きました。僕も建築家ですからこういうのでも設計料を取るのには職務ですけれども、これはとても取れない。取れないどころか建築資金を集める羽目にまでなって、昔の坊さんと同じです。だから勧進、お金を自分で集めてそれで何かものをつくるやり方を、遠い国ですけれども完璧に実現できた。だから、設計家としたら一生懸命やればやるほど自分の懐からお金が出て行く。その代わりにインフレの日本に帰ったらきちんと稼ごう。日本で稼いでアジアで使えばいいという割り切り方を持っていないととてもできない仕事だったと思います。

私も教育者の端くれですけれども、日本では仏教とか宗教のアイコン、シンボルみたいなものは教えるにはいけないし、議論してもいけないんです。それがモダンデザインの宿命です。それでもここでモダンデザインをやっても意味がないのはすぐにわかりました。小乗仏教のメツ



Fig.5 ひろしまハウス外観
Hiroshima House:
Outside view
Fig.6 ひろしまハウス内部
Hiroshima House:
Inside view



カの境内ですからそれなりのデザイン、仏足、「足」です (Fig.4)。日本でこんなのをデザインしたら間違い、あいつは仏教に凝り固まった変な奴と言われるのがオチですけれども、カンボジアではこれがないとどうしようもない。自分でもよくもこんなことをやったなと思いますよ、今はね。

出来上がったのがFig.5で、仏足が二つこの中に入っている。そしたら寺のものすごく偉い僧正が来て、ここはカンボジアだから屋根をかけろと。私も教育でモダンデザインを頭から叩き込まれていて、屋根をかけちゃいけない、屋根をかけると採点はAじゃなくてCになる。だからやだなと思いました。でもどうしてもかけろとデザインさせられました。で

it. They were also concerned about the publicly perceived meaning of the Atomic Dome and Peace Museum because primary school and upper school children visiting there as part of their school excursions made merry there just like they would if they were visiting a theme park. People were discouraged that children would not understand the meaning of peace. They then decided to build something like another Atomic Dome in a very difficult country. I was invited to help the project to construct a building to help people remember the tragedy in Cambodia.

I have visited Cambodia a number of times in the past ten years. People from Hiroshima and young people from every part of the world took part in building this house. They usually spent the first day sightseeing, but when they saw the exposed mound of skulls of victims of Pol Pot's massacre, they seemed to feel something deep. I observed such scenes at many occasions (Fig. 2).

Fig. 3 is a construction site. Volunteers from the world each pile up a brick. The brick piling continued for ten years. I found a naive and goodwill sentiment looking for a better future among volunteers.

In Japan, we are not supposed to teach religious icons or symbols at school, we cannot even talk about them. But this building is located within a temple of Theravada Buddhism in Cambodia, the situation is quite different. Its design had to be relevant with Buddhism, hence, the Buddha's feet (Fig. 4). Fig. 5 shows the completed building in which a pair of Buddha's feet are enshrined. Then, a high ranking reverend told me to cover it with a traditional roof. As a student of modern design, I was taught to cover a building with a flat roof. But when the roof was built, the building looked nice. I wondered whether the education I received might have been wrong. This was a great discovery to me.

VOICE OF DESIGN トークサロン 行動する建築家・石山修武さんと2時間

きてみたらなかなかいい。こちらが受けてきた教育がおかしいな、と思ひまして、それが非常に大きな体験だった。ここの建物は内部の壁は素人で、外回りはプロに積ませました。

内部はなかなか良くできていると思います。全部素人、デザイナーとか建築家があだこうだというのではなく、デザインも世界中から参加してくれた人に好きにやってくれと。これはどうしようもなくなると思ったことがありました。下手っぴな人も、ちゃらんぼらん人もいます。それが10年経ってまとまるとなかなか悪くない。こういうデザインもありだったかと。レンガも一日一日積み上げ、建築全体の高さで8階建てくらいになる。今は終わってホッとしてますけど、まあよく積み上げたなと思います。人間にはこういう可能性があるのだと実感いたしました (Fig. 6)。

壮大と精緻 Fig.7は北京オリンピック主会場に隣接する建物です。オーナーが私の知り合いで、当時その人はまだ39歳。万里の長城をつくるというのがこの「北京モルガンセンター」のコンセプト。今、コンセプトなんていうのは学生言葉ですよ。しかし大きさの概念が全然違う。中国にも資本家がきちんと育ち始めていて、ホラも半分かも知れませんが、おそらくこれは将来ロックフェラーとかモルガンとかメロンとか、そういう財閥の創始者の一人だろうと思います。今42歳くらいですが、登り竜というのはそう

いうものかと。私の友人がデザインしたわけのわからない形にして、ロシアを脅かしているかたらしい。なんかよくわからないのですが竜だそうです。胡錦濤主席はこれを見てなかなかいいじゃないかって言ったんです。中国の将来の様式はこれもあり得ると。四角いのは本当は嫌なんですよね、中国は。ここはビル・ゲイツさんが、隣はオーナーの祖父が、右はドバイの王女さまが持っている。長さが600m、半端じゃない。それでも、もうちょっと大きいものをつくれれば良かったと。やっぱり日本と違う。これは非常に重要なことです。

中国では、なにしろスケールアウトをする。Fig.8もその一つ。中国で都市計画のコンペティションに応募して、応募した途端に中止になったもので、北京の都市計画課の倉庫に今埋まっています。なんのためにやったんだと思うけれど。でも応募した途端にお前のは2等だとか言われて、中国は不思議なところだなと思いました。これはいい計画なんです。日本では実現できようがないですが、直径8kmくらいあって、半径4kmくらいに15万人のアパートメントハウスです。中国も今我々日本と同じ高齢社会になっています。それから激しい格差社会。老人の問題は最大の課題です。それで福祉ゾーンをインフラストラクチャー、都市の主構造にしようという都市計画です。ここでは電気自動車以外は使わない。隣の町全体をクリーンエネルギーの製品生産地にして、郊外はみんな農場で、農産



Fig.7



Fig.8

Fig.7 北京モルガンセンター
Beijing Morgan Center
Fig.8 中国葫芦岛福祉都市計画
Huludao Island Urban Design, China

物があって初めて都市は成立するというのは中国でもよくわかっています。この計画地は遼寧省の葫芦岛で、ここの不凍港から九州への航路をつくる。日本は将来、特に九州地区は中国のマーケットになり得ると当然中国側は踏んでいるわけです。それでこんな計画をしました。これは日本ではとても出来ないけれど、日本で今、我々が学生に教えたり、こういう計画がいいと考えるものと中国が考えているのは全く違うという現実があります。どっちが進んでいるとかいう問題じゃない、価値観が違う。

インドを除いて東南アジアの各地が今残念ながら日本の影響力はもう全くないといっている。バイパスで中国を介さな

I think the interior is quite nicely done. The house was built by all amateurs who piled bricks as they liked. I sometimes felt helpless with their poor work, looking at the completed building, it is not bad at all. The total height of the house is equivalent to an 8-story building. I am amazed to realize that people have this kind of potentiality (Fig. 6).

* Magnificence and Minuteness

Fig. 7 shows the building next to the Main Stadium used for the Beijing Olympiad. The owner of this building is my friend. He was a 39-year old upcoming capitalist at that time. I know the designer of this building, but I cannot understand his intention. He says it symbolizes "dragon", but to me it appears to threaten Russia. President Hu Jintao appreciated the design. Their sense of scale is different from ours. The building is 600 meters long, but

the owner says that he should have built a longer one.

Everything in China tends to be over-scaled. Fig. 8 is an example. I submitted this plan to a competition for a city plan in China. The competition itself was suspended soon after I submitted it. In this plan, the area has a diameter of 8-kilometers, and there would be apartment houses for 150,000 people in an area of a 4-kilometer radius. Like in Japan, China is undergoing a process of population aging with lower fertility. There is a large gap between wealthy and poor people. This plan intends to consider social welfare zones as its main element. Only electric vehicles will be used. The next town will be wholly used as the manufacturing base of clean energy. The suburbs will be cultivated as farm lands. Chinese people understand well that city life can be supported by agricultural produce. This port will be built on Huludao Island, and a shipping route to Kyushu will developed. They foresee that

い限りなにもできない。これははっきりしている。我々は韓国も含めて東アジアというコミュニティみたいなことを構想していかないと、多分日本の先はないだろうと思います。

Fig.9は、先ほど司会の方がご紹介くださった、日本デザイン機構の初期に国連に提案した難民向けの病院です。日本の特技は縮めること、小さく小型化していくことで、これは実際に縮みます。前の北京モルガンセンターみたいなことは日本人には向いてない。その友人に、「お前ちょっとでかすぎるぞ」というと「お前がやっていることが小さすぎる」という。でもこういう小さいのは、おそらくIDの分野ですけれど、日本人は得意です。小さくてテクノロジーが詰まっています、人々の役に立つというのが歴然としているものでないとこれからやっていけないと思います。

やはりダメでもしつこく提案していかないと実現できません。チリで建国200年祭に、この病院を別のかたちで実現していこうと思い、クルマでもなくコンテナでもなくエネルギーを自給自足して動き回るものを考えました。というのはこれからどんな災害があるかわかりませんから、かなり可能性があると思います。こういうものがこれから日本のプロダクトとして求められると思います。

心をよせる Fig.10は不思議なクライアントで、北海道の帯広市にある北海点字図書館という日本で三番目にできた点字



Fig.9 日本デザイン機構国連難民病院プロジェクト
Japan Institute of Design: UN Refugee Hospital Project

図書館です。昭和23年にヘレン・ケラーが北海道を訪れたことを記念してつくられました。今日本は苦勞していますけどヘレン・ケラーは三重苦ですからね。もう大変な人で、それを記念したい。でも何か伝えなきゃいけない。それで盲人のための美術館をつくってくれて、それはできませんよ。でも、やってみたいなあと思って。これは本当です。盲の人に絵が見えるようにと出した答えは単純です。目明きも盲も同じ状態にいればいい。だから中に入ると真っ暗です。目明きもうろろ歩き、そろそろ階段を昇っています。結局、盲の人に絵が見えるわけないです。でもいろんなことを教わりまして、目の見えない人も目蓋の裏にいつも映像を持っているらしいんです。そういうことが今とても気になるところでして、幸いにこういう仕事って尾を引くというか、これをもっといろんな人が体験できるように、増築をしてくれと、つい3週間前にいわれて、今増築計画をやってお

ります。目に見えるものは少ないですけども、北海道です。塔の外壁面にピアノ線が5本くらい張ってあって吹雪くとハーブシコードの音が聞こえとか、雨だれの音を楽しむとか、そういう変なあまりお金のかからない装置が満載されています。

僕は若い頃から無防備なままに仕事を始めたんですね。それで、20代の後半に保育園をつくってひどい目にあったんです。子どもがいないのに、子どものことがわからずに保育園なんかをつくってすごい失敗をして、それ以来子どもの施設でいいものをつくりたいと思っていました。Fig. 11は派手な格好はしていませんけれども、とてもいい施設をつくるのが出来ました。今年の春完成しました。見えているレンガはカンボジアからコンテナで届いた「ひろしまハウス」で使ったレンガです。これは工業製品ではありません。本当にいいレンガです。人間一人ひとり全部違うように一つひとつにム

Japan, particularly Kyushu will become their market. Hence, I conceived this plan.

Japan no longer exerts influence on Southeast Asian countries. We must work on them through China to carry out something. In order to secure the future of Japan, we must create the East Asia community including Korea.

Fig. 9 shows a hospital for displaced people that I designed in the early days of the Japan Design Institute. Japanese like small and shrinking things, and have special skills in producing them. This hospital can actually shrink. It will be the field of industrial design, rather than architecture, but we need to push forward our specialty to produce small things which contain various technologies and which are useful for people's life.

* Being sympathetic

This is the third built Braille library in Japan (Fig. 10) in Hokkaido. Helen Keller visited the place 100 years ago, and people there wanted to build the Braille Library in her memory. In order to make it special, they gave me an order to create an art museum to allow the blind to see pictures. It was not realistic but challenging. The solution I found was to give no light inside. Both those who are visually handicapped and those who are not equally walk slowly and carefully. As a matter of course, they cannot see any pictures. But I learned that those who are visually disabled always have imagery behind the eyelid. The Library asked me three weeks ago to extend the library to allow more people to share the experience, and I began to plan its extension. Five lines of piano wire are applied the outer wall of the tower. When it is stormy, these lines sound like a harpsichord. When it rains, the sound of raindrops can be heard. A number of such devices are contained

VOICE OF DESIGN トークサロン 行動する建築家・石山修武さんと2時間

ラがある。カンボジアですから、焼く温度もそんなに高くないし、一つずつが全部違う。それが子どもの、保母さんの、手にすごく馴染む。それをテーマにした保育園と乳児院です。

親に捨てられてはいないけれども見放されたような子どもたちの乳児院と保育園とが合併した施設です。

Fig.12は同じクライアントの最初の仕事の多機能型保育園です。子どもというもの、小さい子どもたちの可能性にこれから我々は託していかなければいけないので、続けたいと思っています。

鎮魂のデザイン さて、今日の本題です。僕は先ほど紹介していただいたように、今度の震災で一番やられたところ気仙沼には1980年代から15年くらい通っていたんです。今度の震災で知り合いをずいぶんなくしています。それから僕がつくったいろんなものも全部流されました。世界で一番のマグロはえ縄漁の気仙沼の船がアフリカ沖とかリスボン沖とかモンテリオール沖とかへ出ていく。皆さんが時々食べるいいトロはものすごく高いでしょ。それはみんなこの船が獲っている。船は2年くらい気仙沼に帰って来ないで、漁師さんは飛行機で行き帰りしている。一隻のマグロはえ縄漁の船は150kmの釣り針の糸を流す。糸といってもワイヤーですよ。150kmといったら東京一焼津間です。ですからこれは半端なビジネスじゃない、地球規模の産業です。船が出て行きますとアメリカ、フランス、

イギリスの人工衛星が監視している。クジラの次に捕獲禁止になるのはたぶんマグロだと言われています。そうするとものすごくトロが高くなりますよ。

僕がなぜ初めて気仙沼に行ったかと言うと、世界一の海の博物館をつくって、それは当然行きますよ、しめたと思ってね。でも行った途端にどうもここにはそんなにかい博物館はいらないなって、正直なところ思いました。だけどいろいろ相談して博物館はちょっと先に延ばして将来何かをつくるにしても、まずはマグロはえ縄漁の船の接岸する見送り岸壁といいますけど、700mくらいの並木道をつくろうと、地元の人たちと始めたんです。

並木道をつくる苗木を買おうと、それはきれいごとですけど、きちんと実現できました。東北の人たちは世界一が好きです。気仙沼ではマグロの貯金箱、世界一の馬鹿でかい貯金箱をつくりまして、この貯金箱に遠洋漁業の漁師さんとかいろんな人たちがたくさんお金を入れてくれる。政治家の人が来ると観客がいるので何万円も入れますからね。だから結構儲かる貯金箱になったんです。1500万円くらいたまりました。

集まったお金でこういう道ができました (Fig.13)。一生懸命デザインした街灯もありました。昔は平安な時代だったから、昔たって20年くらい前ですよ。この街灯を20何本建てたいと言ったら、役所がダメだと言う。どうしてと聞くと、これはカラスがとまる、カラス公害にな



Fig.10 十勝ヘレンケラー記念塔
Tokachi Helen Keller
Memorial Tower

Fig.11 至誠館さくら乳児院
(2011)

Shiseikan Sakura
Infant Home (2011)

Fig.12 星の子愛児園 (2002)
Hoshinoko
Kindergarten (2002)



るといふ。それで退くのもちょっとと反抗しまして「これにカラスはとまらない、カモメしかとまらないかたちにしていく」と。じゃあお前、念書を書け。だから僕は「これはカモメが好む街灯です」って念書を書きました、ハンコついて。津波が来る前はカモメもカラスも両方当然とまっていた。建築をつくるより、ただか700mくらいの並木道をつくる

in the library.

When I was in my late 20s, I designed a day nursery without knowing about children. It was a failure. Since that time, I have been hoping to build a good facility for children. Fig. 11 is a successful one which was completed in spring 2011. We had bricks made in Cambodia transported. The temperature of the kiln to fire them was not high and the bricks are all finished differently. But they are friendly to the hands of children and nursery teachers as well. This is a nursery school and infant home with the theme of using these bricks. Fig.12 is a first multi-functional infant home for the same client. We must pin our hopes for the future on small children, therefore, I would like to continue to design good buildings for children.

* For the Repose of the victims

Since the 1980s I have been making frequent visits to Kesenuma in Miyagi prefecture, which was most seriously affected by the Great East Japan Earthquake. The lives of many friends were lost and many of the structures which I designed were washed away. Kesenuma has the world's largest port of tuna longline fishing. Fishing boats go as far as offshore Africa, offshore Lisbon or offshore Montreal for nearly two years. Tuna fishing is not a local industry but a global industry.

My first connection with Kesenuma was an order to build the largest ocean museum in the world. It was an exciting order, but upon arrival at the site, I honestly thought that such a large museum would not be suitable there. After discussions with the local people, we agreed to build a 700-meter long tree lined road along the "sending-off" pier of tuna fishing boats. First, we had to raise funds to buy seedlings. People in the region like the idea of

方に相当なエネルギーを使いました。その時にいろんなことを学びました。

Fig.14は被災地に行った後、6月11日に恥ずかしながら描いたスケッチです。この絵の通り地獄です。火でまちが焼かれて何千人の人が亡くなっています。

僕は復興する前にまず鎮魂、亡くなった方の魂を鎮めて差し上げ、それに対する畏敬の念を持つ方がいいと思いました。僕がスケッチした安波山、標高240mくらいの低い山ですけれども、海から直接見ると大きい山です。この山にこういう植栽をしていこう、復興に際してまず建築は建てちゃいけないと思いました。なまじなものをつくっちゃいけない。まず人の気持ちを穏やかにするのが大事で、そのために膨大な植栽をしようと最初にスケッチを描きました。桜を植えよう、桜の並木。藤の花を円形に植えよう、ここには中国の黄色い花の木を植えようと、デザインをいたしました。それで詰めていったら、藤は杉の木とか良い木に寄生してダメにするから50年後はたいへんだよ、と植木屋さんに言われて。木のことを知らないんです。ちょっと不勉強すぎたなど、その逆転をして、自然のデザインを、ここにずーっと延長してみようと考えました (Fig.15)。

大きなすごい津波でしたからこんなにかい船も打ち上げられて、今、取り払えという人と残すべきだという人と賛否両論たいへんなことになっています (Fig.16)。忌まわしい記憶を残すべきか、取り払うべきか、これは5対5で揉めてい

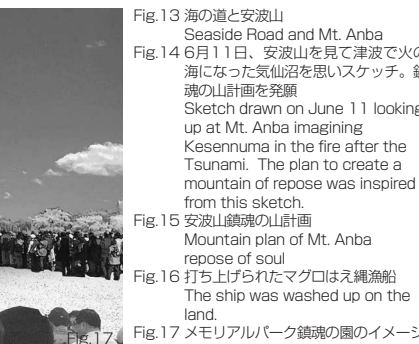


Fig.13 海の道と安波山
Seaside Road and Mt. Anba
Fig.14 6月11日、安波山を見て津波で火の海になった気仙沼を思いスケッチ。鎮魂の山計画を発願
Sketch drawn on June 11 looking up at Mt. Anba imagining Kesennuma in the fire after the Tsunami. The plan to create a mountain of repose was inspired from this sketch.
Fig.15 安波山鎮魂の山計画
Mountain plan of Mt. Anba repose of soul
Fig.16 打ち上げられたマグロはえ縄漁船
The ship was washed up on the land.
Fig.17 メモリアルパーク鎮魂の園のイメージ
The Memorial Park

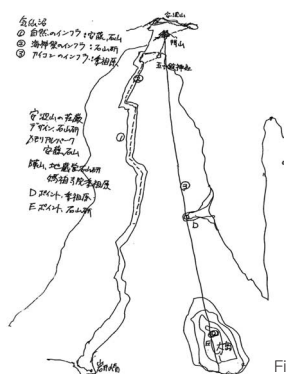


Fig.18 ①気仙沼湾岸に森の構造線 ③安波山と大島を結ぶ荘厳の軸線概念。(以下編集委員会調べ) 図中湾奥にメモのある五十鈴神社は南の東松島市から牡鹿半島海沿いに、全国の五十鈴神社の約76% 44社が集中する五十鈴神社の北限である。なお、日本における媽祖廟は2006年横浜中華街に落慶し、参拝者が絶えない。また、青森県大間町の大間稲荷神社には、天妃媽祖大権現が祀られ、台湾の媽祖信仰の総本山である雲林県の北港朝天宮と姉妹宮である。
①Structural line along the Kesennuma gulf coast ③ Conceptual Axis connecting Mt. Anba and Oshima island.
(Information by the Editing Committee below: Isuzu Shrine noted at the depth of the gulf is the northern most of all Isuzu Shrines. Of all Isuzu Shrines in Japan, 76 percent are concentrated along the coast from East Matsushima city and Oshika peninsula. The Mazu shrine in Japan was established in Yokohama China Town in 2006. It is attracting worshippers. Tenpi Maso Daigongen (Mazu) is enshrined in Oma Inari Shrine in Oma town in Aomori prefecture. It is a sister shrine of Bigangzhao Tiangong, the Head Shrine of Mazu belief in Yunlin province in Taiwan.)

Fig.18

being the "world's first," and we prepared the world's largest savings box in the shape of a tuna. Fishermen of pelagic fishery and many others gave their donations. When politicians visited the place they gave quite a large amount of money in front of an audience. Thus, about 15 million yen was raised. The result is this road (Fig. 13). I designed street lamps with devotion. Fig. 14 is my sketch of the disaster affected Kesennuma on June 11. It is hell as you see. Fire burned the city and thousands of people died. So I thought we should first soothe the souls of the victims and develop a feeling of awe toward them. Mt. Anba in my sketch is only 240 meters high, but it looks higher from the sea. I drew a sketch to plant trees and flowers on the mountain to help people to calm their minds. I designed plants scenery; cherry trees here, wisteria trees in a circle, and yellow trees from China here. I want to extend this natural design into the town (Fig. 15).

This large ship was carried up onto the land by the tsunami (Fig. 16). People were divided into two whether to remove it or keep it as a memory. A number of people lost their lives because of the ship. So, it is not easy to say that it should be kept. There may be dozens of remains under it, so, we should not build anything there. I personally thought that the ship should be retained as a symbolic scene of Kesennuma. I am going to propose the planting of cherry and wisteria trees in a 400-meter diameter circle to surround the ship. When they build new facilities, I propose that a forest should be created in such a way through which facilities can be glanced. Trees, flowers and plants come first, then buildings and people's life. This is the plan that I will present to the people there (Fig. 17). The forest extending from Mt. Anba will be the main element of the new city instead of conventional express highways and Shinkansen railways. Tadao Ando called this the "Forest of Repose"

ます。私たちが並木道をつくったときも木の種類で市民がものすごく割れましたからね。そういう時はいいものができると思います。この気仙沼の象徴的な風景です。この船によってなぎ倒されて死んだ人はすごくたくさんです。だから残せとは簡単に言えない。この下にまだ何十人という人が眠っておられるかもしれない。だから建築は建てちゃいけない。絶対に建てちゃいけない。

僕はやはり残した方がいいのではと思います、ここにも桜と藤の花で400mくらいのサークルを立ててその森が主役で、その中にほのかに見えるように何かつくるのであればつくみましょうという提案をしようと考えています。木と花と生物があって初めて建築とか人間の生活が営まれていくと考え、市民の人たちにこれから見ていただくという段階です (Fig. 17)。

安波山から自然の緑の、森林を続けて、都市の主構造にする (Fig.18)。今までの主構造は高速道路と新幹線です。それもあるけれど、先ほどの葫芦島で見ただいたように福祉とか弱い人たちとか子どもとかおじいちゃんおばあちゃん、そういう人たちのための森をここにずーっと外延させていこうと。幸いこれは復興構想会議の安藤忠雄さんがやはり鎮魂の森と言ってくださっていて、一緒にこれを実現しようとしております。建物は二の次三の次だというのは、もう歴然としてきた。

それから中国、台湾の経済力を被災地

に投入せざるを得ないだろう。ですから先ほどからちょくちょくご紹介している友人の建築家・李祖原さんに、ここに中国の何かを設計してもらおうと。人々の生活、本当の復興となると、外の力も考えないとダメだし、それに彼もここに来て「石山、中国には11世紀から続く「媽祖 (マーズー)」信仰がある。信者の数が2億人、日本の人口の倍いる」という、その人たちを「媽祖妹妹 (マーズーメイメイ)」といい、海のマリアさまみたいな神様を祀る団体です。この人たちを目当てにしてこの施設を、僕も本当はやりたけれど僕がやったら中国人は来てくれないだろうし、気仙沼の人は中国は嫌だって言う。難しいです、世の中。なぜならば、漁業で生きていますから尖閣列島問題で中国人は絶対に許せない。まあ、台湾経由ならいいって言う。面白いですね、大人の感じて。つまり、台湾経由で呼んでこい。だからどうなるかわかりませんが、ここに台湾の華僑資本のお金と知恵を少し借りよう、過大に借りると中華街なんかが出来ちゃうと後世僕も何を言われるかわかりませんので、ちょっと控えめに。それからお祭り、儀式的ラインと輻輳した計画案をこれからやっていこうかなと。5月に安波山の植樹祭をやろうと安藤さんと計画していますので、その時に媽祖妹妹に、2億人いますから、その一部の台湾の人たちにこちらに来ていただく、それで何か儀式をつくることから始めましょうと考えております (Fig. 18)。

開放系技術 我々皆さんも含めて東京の人は基本的に食料、電気その他、東北におんぶしていたことが今度の災害で痛切にわかったと思います。魚も米もみんな東北です。それにおんぶして我々は非常に豊かだったかもしれない「消費生活」を送っていたわけです。それで僕は世田谷に住んでいるのですが、世田谷を、東京のこともこれから本当に考えていきたいと思います。区長と一緒に世田谷式生活、ライフスタイルをどうすべきかということから考え始めています。気長ですね。「ひろしまハウス」の経験から、僕は市民参加はものづくりにとってまどろっこしくて嫌なんです、本当は。みんな言いますからね、意見を。それをまとめることはとても難しいです。だから本当にキツイだろうと思うんですけど、そうせざるを得ない時代になり始めていることは痛感しております。テーマはクリーンエネルギー。

Fig. 19は私の家です。外観はとてもお目にかけるようなものじゃないですけど、面白いことをちょっとやっけて、これソーラーセルです。セルは一辺20cmくらい。これでダースと15mくらいありますとだいたい2.5kwが発電できます。この長さで約6万円です。これだけ覚えて帰ってください。これをガラスとサッシが入った太陽光パネルにすると何十万円となる。おかしいですね。そういう矛盾を本格的に考え直していかなくちゃいけない。だから僕は今このソーラーセルを使って昔の鉱石ラジオみたい

and we are going to put this into reality together. Another point to help rehabilitate the affected area is to invite economic inputs from China or Taiwan. I brought my architect friend C.Y. Lee to Kesenuma and asked him to design something there. He suggested that he could bring a religious center for Mazu, goddess of the Sea, followers. There are 200 million followers called Mazu sisters of this belief dating back to the 11th century in China. I intend to introduce overseas investment from Taiwan here. Together with Tadao Ando, we plan to organize a festival and ceremony on May, 2012 to launch the tree plantation project on Mt. Anba. At that time, I plan to invite some people from Taiwan (Fig. 18).

* Open technologies

I understand that people in Tokyo truly have realized that their life

is basically dependent on the Tohoku region for their food, electricity and other industrial products. I live in Setagaya city in Tokyo, and I plan, together with the city chief, to push forward the Setagaya lifestyle. Through my experience in building the Hiroshima House, I have learned that I don't like a citizens' participatory style of project as it much time and energy is consumed until a consensus is forged. But at the same time, I know that we are in an age that we must take this process. The theme is clean energy.

Fig. 19 is my house. I am trying an interesting thing here. These are solar cells. One side is 20 cm, and when they are arranged in the length of 15 meters, they produce 2.5 kW/h of electricity. In this state, they cost about 60,000 yen. When they are processed as solar panels with glass covers and frames, the cost is increased to several hundred thousand yen. We have to consider ways to solve

な太陽光発電のやり方を考えてみたい。これ1枚ちょうだいと言っても消費者は買えない。僕がホンダに行ってこのエンジンだけ下さいって言うことはできません。そのエンジンは一台2万5千円くらいです。ことほどさように今消費社会は非常に複雑なねじれをもたらしている。先ほど司会の方が開放系技術と言ったのは基本的にはこの1枚、この1台が買えることです。技術をもうすこし我々の生活の身近に引き寄せる方策を立てなきゃいけないと思います。

それで、世田谷の馬事公苑あたりで植木市とソーラーセルとかのバザール、市場を主催してみたいと思って少し準備にかかっています。

Fig. 20が僕の今まで申し上げたことの全体像です。

モダンデザインの見直し 冒頭に言いましたようにモダンデザインは、我々が建築とは、あるいはデザインとはこういうものだという幾つかのオリジンがありますが、基本的にはバウハウスから始まりました。ワイマールのバウハウスは、後に Dessau に移り、今バウハウス大学という名でデザインを教えています。この大学は世界のデザイン・イデオロギーをこれからカバーしたいという野望を持っています。あまり知られていませんが、バウハウス大学生誕の時から隣に巨大な墓場があるんです。そして創始者から先生たちとかいろんな関わった人たちは皆ここで眠っています。バウハウスは歴史

と断絶していくというのがモダンデザインの本当は要だった。でも自分たちは結構歴史と断絶していない。だって墓場の隣にあります。だから歴史も急速な見直しが今度の震災以降世界中で、というか日本で起きると思います。このモダンデザインの始まりにちょっとクエスチョンマークをつける必要があるだろうと考えております。

グロピウスはモダンデザインの始まりですけれどもこういうデザインを残している (Fig.21)。これモダンデザインじゃないですよ。非常に表現主義的で芸術至上主義みたいなのところがあって、だからモダンデザインのオリジンもちょっと問題があった。モダンデザインはバウハウス流のグローバリゼーションと、もう一つはアーツ&クラフツ運動という流れがあったのですけれども後者の流れを再評価する動きがかなり強く起きると予測しております。

最後はすこしシリアスな話になりましたけど、最初にベイシーの話を聞いていただきましたので、緩い話とシリアスな話で初めと終わりですからバランスが取れたかと思います。今日の話はこれくらいにして、ありがとうございました。

石山修武 (いしやま・おさむ)

1944年生。早稲田大学建築学科教授。日本デザイン機構理事。主な作品：幻庵、伊豆の長八美術館、気仙沼リアスアーク美術館、世田谷村、ひろしまハウス。日本建築学会作品賞など受賞多数。著者『石山修武、動く、建築が変わる』(1999年 TOTO出版)、『生きのびるための建築』(2010年 NTT出版)『建築が見る夢』(2008年 講談社) 他多数。

進行中の主なプロジェクト●宮城県気仙沼・唐桑復興計画●世田谷区「世田谷クリーンエネルギー」。

●「三陸海岸被災者支援給食プロジェクト」。石山氏の呼びかけで始まったこの活動は、石山氏が給食を描いた葉書を販売、その収益を支援金として気仙沼市と唐桑町に直接手渡している。この活動をさらに展開し継続して支援を行う予定。



Fig.19 世田谷村セルフメイドのソーラーバッテリー
Solar batteries made by oneself/Setagaya Village

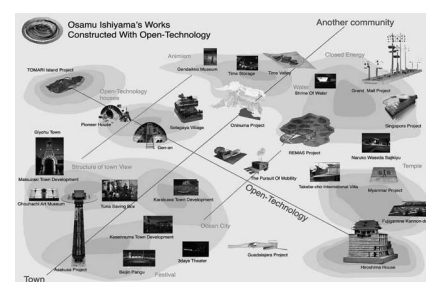


Fig.20 石山修武の仕事、関係図
Osamu Ishiyama's activities: Matrix



Fig.21 グロピウスによる表現主義的モニュメント
Expressionistic monument by Gropius

this problem. Just as we made radios by hand in our youth, we should be allowed to make solar power systems for ourselves. We should be able to buy the number of solar cells that we need. I began to prepare for a market to sell solar cells and plants at the Horse Racing Park in Setagaya.

Fig. 20 gives the whole picture of my activities mentioned above.

* Reviewing Modern Design

It can be said that modern design basically began with Bauhaus. It is now well known but there is a large cemetery next to the school where its founders, teachers and those who were involved in the school rest in peace. The key of modern design was discontinuity from the past. However, Bauhaus people themselves are not disconnected from history. After the Great Earthquake in March, reviewing history has rapidly gained strength in the world, in

particular in Japan. Walter Gropius, the beginner of modern design left this design (Fig. 21). It is a work of expressionism rather than that of modern design, and he had a tendency of being an art supremacist. Therefore, the origin of modern design should be questioned. In modern design, there have been two major trends, globalization promoted by Bauhaus and the Arts & Craft Movement by William Morris in England. I am sure that the latter trend will be reevaluated from now.

ディスカッション



佐野邦雄（進行） それでは後半に入りたいと思います。やり取りを始めるにあたって、私の個人的な記憶の一つをご紹介します。30年ほど前、アメリカの環境デザインの第一人者のローレンス・ハルプリンが来日して開いたワークショップに参加したことがあります。1週間くらい経って通訳から「あなた達はハルプリンの本当の核になるところを引き出していない。それはあなた達がやらなくては駄目だ」と忠告されました。今日はこれから皆さんが石山さんの根っ子の部分、核の部分を引き出していただきたいと期待しています。感想、質問、ご意見何でも結構です。

鳥越けい子 面白いと思ったのはいろいろあったのですが、導入でお話しされた一関のジャズ喫茶のJBLのスピーカーと、そういう技術のピークが1950年代60年代という話がありましたね。ジャズ喫茶というのは実は東京にもいっぱいあったのですが、一番のメッカが渋谷の百軒

店だった。けれど今、そこにはもうジャズ喫茶はない。でも一関には残っている。ですから最初におっしゃったような日本に残っていたいいものをどう利用していくかというところに、今までのような時空間の考えではなく、もっと本質的な発想の次元を入れて再編集しないといけないんじゃないかというようなことを考えました。

石山 一関は鳥越さんがお考えのサウンドスケープと対極にある。彼じゃなきゃ出来ない。だから簡単に普遍を言わない。それがあの人いいところ。それから、やっぱりジャズってアメリカが生んだ文化の二つくらいの一つ。アメリカにはモダンジャズとミュージカルくらいしかない。それでそういうようなことを少しわかっていくと、あそこで古めかしい本当に化石みたいな音を出していると、メーカーの社長さんが来てこんなものをアメリカがつくっていたのかという実感に結びつく。ドイツの人が来るとやはり昔の50年代60年代初めのライカが一番カメラとしては良かったと。



鳥越 忘れていたものを見て、自分たち自身が失ったものに気づかされる。それが一関のようなところにあった。

石山 一関のものは個人の尊厳をもって保存している。そこにかっこ良いところがある。あんまり簡単に普遍化していかない、むしろ個別化している。ちょっとへそ曲がりの論理に聞こえるかもしれないけれど、個別性というかそういうものが今非常に大事になっている。コンピューターが進んでいくともっと個別になっていくと思います。

鳥越 へそ曲がりの人はやはり東京の方が生き延びにくいという感じ。へそ曲がりの人が一関に残っていたというところが面白い。東京の方がグローバル化をまともに受けてしまった。密度が高いので、偏屈な人たちもいたけれど、やはり時代の力にさらわれてしまった。

石山 考えてみれば日本であの東北の片田舎に一軒だけ残っているというのがいいのかもしれない。

Discussion

KUNIO SANO (moderator): I would like to begin the discussion session. I expect that you would bring out what he has in mind but not expressed in words.

Keiko TORIGOE (floor): The speaker set of the coffee shop interested me. There used to be many coffee shops in Tokyo's downtown districts in which jazz records were played, but they are no longer in existence. It is, therefore, interesting to know that the speaker system manufactured at the peak of its technology still remains in use in Ichinoseki. We might want to shed light on other such "best products of the world" that remain in use in Japan today.

Osamu ISHIYAMA: Some years ago, the current president of the

manufacturer of the speaker system visited the shop to hear the sound. He was surprised that such a system was manufactured in the 1950s and 1960s in the United States. This is also true of Leica cameras of Germany. This person in Ichinoseki has maintained the system with his pride. This attitude to devote oneself to a particular thing is important today.

TORIGOE: As Tokyo has a large population, there might be more of this kind of people, but the surge of globalization has overtaken those people.

ISHIYAMA: In a sense, it is good that such a shop exists in a corner of the Tohoku district.

Daiki AMANAI (floor): I remember you often said that you are making things with the spirit of Akihabara spirits. I understood this to mean that you would buy parts in Akihabara and then

天内大樹 普段は建築を研究しています。先生は昔、秋葉原感覚ということをおっしゃっていたと思うのですが、つまり秋葉原の人たちが今のアキバではなくて部品屋さんで真空管を買い叩くような、そういう姿を観察なさっていたと思うのです。今日の話も一関のジャズ喫茶の話ですか「ひろしまハウス」のボランティアがレンガを積むとか、それから世田谷式生活というところでソーラーセルを並べるとか、そういう話は割と文脈としてすごくつながっている感じがしました。

その話と気仙沼の話との関係が良くつかめなところがあって、もし先生が気仙沼感覚で住宅を考えるみたいなことをお考えであれば、住宅でなくても建築全般あるいは復興全体を考えてもいいのですが、気仙沼との関係はどういうふうになっているのでしょうか。

石山 理路整然と秋葉原感覚で住宅を考えていたこと、僕が今日最後に自分の家でソーラーセルを鮫石ラジオみたいにしてつくるべきだ、というのはその考えがずっと続いています。

気仙沼感覚というのか、気仙沼というところの特殊性というのをはっきりいって、リーダーがグローバルでそれで資本もグローバルです。一方、住民たちというか実際に生活をなさっている方々というのは非常に偏屈な人が多い。でもあそこで僕らが参加した「海の道」をやった時は毎回住民集会というのに引張り出されて、何千の人たちからつるし

上げられた。その時の経験から49対51くらいでものごとが決まってく時が一番いいなと実感した。みんなが90%賛成とあったことは10年経ってみるとあんまりろくなことがない。

ちょっと話がずれますが、僕をつくったものはみんなにあんまり拍手喝采されない。いいぞいいぞと言ってくれたものはもうみんな忘れてる。つくった当時にこてんこてんに言われたものだけが残っている。だからそれが時差みたいなものがあって、そういう考え方もやはり10年20年単位で考えていくと氷解する。そういう持続力みたいなものがあつたんじゃないでしょうか。

浅香喬 石山さんが今、宮城県の気仙沼や唐桑、そういうところで活動をされているという一端をお聞きして、グローバルとローカルというかそういうすごく悩ましい問題を解決しなければいけない時代に入ってきているなというのを感じています。石山さんが気仙沼でいろんな活動をされているなかで、本当にこの地域というのは復興するのかなという疑問はないでしょうか。僕も女川へ行ってきまされたけどそういう疑問を持って帰りました。

日本は地方が本当に高齢化している。こうした地方に子どもたちが育つのか。そこに生活の場を築くことが出来るのかという疑問をすごく感じている。東京がどんどんグローバル化して日本全部を飲み込めばいいのかもしれないけれど、実

際にはそれは無理だし、意味のないことだと思っている。そういう時に日本の地方というのはこれからどうなるのか。それを試されているような気がする。

今は情報化社会と言いますが、物の生産という意味での再生というのはもっとも先のこと、結局一次産業、特に農業、漁業が復興しないことには彼らの生活基盤はない。それを日本が背負っていけるのか。そういう思いを強くして帰ってきました。またグローバルとローカル、これをどういうふうに分かちの中で整合させていくかというのが、綺麗ごとじゃなくて大きな問題だと思う。行政は一向にそれに手を付けなくてこの半世紀以上過ぎてきてしまった。ですからその辺について石山さんにお考えがあればお聞きしたい。

石山 東京生まれの私から見ると、気仙沼の彼らはまさにおっしゃるようにグローバルであつて田舎者なんです。それを自覚している。なぜかと言うと、気仙沼の資本の中核というのは遠洋漁業です。その船主はみんなグローバルです。



石山修武 / Osamu Ishiyama

incorporate them into your design. If you have the Kesenuma spirit or style in your mind, how is it related to house construction or local rehabilitation there?

Ishiyama: In Kesenuma, leaders have a global view, but many of the people are stubborn. When construction of the "Road along the Sea" was under consideration, they held a number of "town meetings" and I attended these meetings to explain the details of the project. My ideas were often criticized severely, and final decisions were made by 51 percent for to 49 percent against. Later, I realized that what was decided upon after controversial discussions resulted in success. Things decided by 90 percent agreement have been proven to be mediocre after ten years. So, we need to consider projects looking 10 years and 20 years ahead.

Takashi ASAKA (floor): I feel that we must squarely face the issue

of local and global thinking. But after visiting one of the disaster affected places, I realized an important thing. The rural population is really aged, and I thought what impact globalization would exert on rural societies. It will take many years to revitalize the manufacturing industry. First of all, agriculture and fishery must be rehabilitated. Without this, they are totally deprived of their means for their living. How can we settle the question of globalization in such local settings?

ISHIYAMA: People in Kesenuma are global and at the same time they are country people. They know that themselves. The ship owners have a global view. At the same time, they have strong identity as Kesenuma folks. Even so, if the fishing industry in their area declines, they have a strategy to change the nationality of their ships to that of the United States which will enable them to continue fishing outside of Japanese territorial waters. When

アフリカ沖からブラジルのアマゾン辺り、おいしいマグロが捕れるのは5カ所くらいしかなく、そこを全部おさえている。マグロの値段というのもグローバルの考え方で決まる。でもある意味じゃ気仙沼モンロー主義というのがある、俺等は気仙沼の人間であると言う。

また一方で漁業が本当に悪くなってきたら、船籍はいつでもアメリカに移せる。そういう戦略を持っている。それでも我々は気仙沼の人間であるという両方を持っている。グローバルとローカルというのは抽象的に考えていくと絶望的になると思う。でも具体的に考えていくと非常に可能性が見える。

僕は建築やっているけど、インダストリアルデザイナーになった方が良かったかなと思ったことがある。今は植木屋がいいなと思っているけど。これは冗談じゃなくて農業、漁業そういうものの一歩中間点にあるのは意外と植栽関係だと考えている。植木、植栽、そういうものをどうやって環境に融合させていくかということに興味をもっている。単にランドスケープとかそういうような言葉に流されない、植木、植栽、樹木、花、そういう分野というのはこれから非常に可能性があると思います。

佐野元子 もともと学校の時はプロダクトデザインを勉強していましたが、縁あって空間系の方に興味が出て、今は景観系、ランドスケープというか土木のデザインの仕事をしています。

気仙沼の方々ずっと長い交流関係を持っている先生が、気仙沼の復興に関しての考え方に建築ではなくてランドスケープというか景観、植栽という考え方をメインに持ってこられていることに驚きました。私は気仙沼には少ししか行ってないけど、南三陸を震災後いろいろ見たり、仮設住宅に伺う機会があった。建築というかコンクリートの大きな建造物が基礎共々横倒しになっている姿を目の当たりにして、建築物のはかなさを実感した地元の人々が自分たちの住むところというのがどうなっていくのか、そういったことにすごく関心があるしその答えが一番望まれていることだと思う。でも先生はそれとはまた違うベクトルで、建築自体でなく鎮魂の丘というか空間、植栽、木、そういうものを考えている。その考え方をもう少しお聞きしたい。

石山 うまく答えられるかどうかかわからないけど、こう考えます。ランドスケープをやっていると言うけど、端的に僕の答えを言ってしまうとランドスケープというものを「庭」って言い直せ、と。庭園と言った方がわかりやすいのではないかな。ランドスケープというものに関してはもうちょっと、漢字とか日本語にほぐした方がいいのではないかな。その方が対象の個性がはっきりしてくる。インダストリアルデザインとかランドスケープデザインとかいうもの全てに、そういう個性みたいなものが要求されてきているだろうと思う。

気仙沼には、こういう時には強い本当

のリーダーがいないと絶対にダメです。袋だたきになるかもしれないけど、あんまり市民ってあてにできない。やはりね、リーダーがすごく必要。リーダーが信頼できるとみんなついていく。僕は幸い気仙沼のリーダーらしき人を知っていて、今私がしていることはリーダーの考えていることに、ただちょっとかたちを与えるだけでいいだろうという割り切り方をしている。そのリーダーというのは気仙沼だと市長とか知事じゃない。それが非常に微妙なところで。だから先ほどどなたかが言われたけど、三陸沿岸で復興できるところとできないところという落差がついてくると思う。いくつも復興できるところとは思えないですよ。でも復興できるところっていいリーダーがいるところだと思う。

小塚真優子 「ひろしまハウス」や打ち上げられた船を撤去するかどうするか、というお話がありました。楽しいというイメージではなくて、そこにいる人にとっては辛い歴史とかが籠っているもの

we think about global and local activities in a concrete manner, we can see great potentiality.

I am specializing in architecture, but I often think I should have become an industrial designer. Currently, I am interested in becoming a gardener. It is an industry between agriculture and fishery. I see strong potentiality in plants, plantations, trees and flowers.

Motoko SANO (floor): I think that the first priority for people in Kesenuma is how they can find places to live. But you are considering a landscape or a hill for the repose of souls with trees and flowers, rather than rebuilding houses. I would like to ask you more about this.

ISHIYAMA: The term landscape can be interpreted too broadly, so I would like to use "garden," so that targets of the work can be

expressed more concretely.

Mayuko KOZUKA (floor): You proposed to keep the ship washed up on the land by tsunami as it currently lies. What do you think is the significance of keeping this thing which is not beautiful and that might cause a negative feeling rather than a good memory among people.

ISHIYAMA: I think every memory is very important for people. We should not forget the hard, tragic events in our history. Culture, including architecture, embraces even sad and harsh memories. Therefore, I think we should keep even unpleasant things.

Every year, I visit Bauhaus in Germany. Every time I visit, teachers there bring me to the site of the former concentration camp in Buchenwald. For them, it is not a favorable place to go. It is not a pleasant place to me either. But they say, "We should be very

であって、そういうものを綺麗に忘れて去ってしまうのではなくて、あえて建築として残していく、残そうとされているその意味というか。音楽など楽しくて一時的なものを好むような人たちがいて、そういう文化がある中で、あまり受け入れられないような負のイメージのある建築を残そうと思った意味を教えてください。

石山 すごくいい質問だと思います。残すと言うか記憶と言うのかな、それって一番大事なもので思うんですね。だから辛くてもそれから悲劇的なものであってもそれは絶対に忘れちゃいけないことだと思います。ですから、建築は、建築だけでなくあらゆるつくられるもの、文化というのは基本的にはそういうものだから。要するに、辛いこととか悲しいことを全部ひっくるめて文化だから。それはやはり僕は嫌なものでも残すべきだろうと思う。

僕はバウハウス、ドイツによく行く。するとドイツの先生が僕をブッヘンヴァルトという強制収容所の跡へ必ず連れて行く。そこは嫌なところ、大量殺戮をしたところですから。もうよしてくれって言うんですよ、僕は。もう見てるからって。でもあの人たちはなかなかいいところがある。用心しないと自分たちはまたやるからって。だからお客さんが来たら必ずもう一回見に行くんだと。それで案内するんだと。一番恥ずかしいことだけ。それを聞いたときにやはり日本の先生よりはだいぶ上だなと思った。嫌なもの

ほど忘れちゃいけないだと思います。弱い人は嫌なものを忘れたがるけど。あなたもこれからすごく嫌なことがたくさんあると思いますよ。だからそれは何かに残しておく。日記をつけるように、メモをつけるように、ものに対してそれを残しておくというのは大事なことだと思います。

会場 最初のカンボジアの「ひろしまハウス」とか、最後の気仙沼の華僑の資本で寺院をつくるというお話を聞いてとても興味深かった。カンボジアの寺院でもある種の治外法権的な言わば神聖な空間であるところにつくるという意味で面白かった。また気仙沼に台湾の信者の方が来ることができるような寺院をつくるというところや、その祈りの空間、神社とかお寺とかそういったものをまちのデザインとして開放的に組み込んでいくことなども興味深かった。そこにはいろんな植栽もあるし、一人になれる静かな空間があると思って、こういうのをどんどん活用してもっとオープンなかたちにしていくといいかたちで復興していくのではないかなという感じがしました。というのも、宗教みたいな話をするとしても今までは煙たがられたりするけれど、どうしてもそういった被災地の場合だと大勢の方が亡くなっているわけだから、死ということに関して向き合わざるを得ない状況にもある。一方でまちづくり全体が死というものに対して非常に今まで閉ざされてきたのではないかなと気がするの

で、この寺院を引っ張ってきたというところをもう少し教えてください。

石山 3.11という時じゃないと祈りとかそういうことは大声で言えない。みなさんもそうだと思うけど、だいたいデザイン教育においてそういうことはあまり考えるなといわれてきた。モニュメンタルなものをつくっちゃいけないって僕は教育された。非常に民主的に教育されたのです。でもこういう事態があるとモニュメンタルなもの、さっき高校生の方がなんで悲惨なことを残すんですかと言ったことに通じるけど、そういうことも含めてやはり残さざるを得ないというふうに考える。祈りとかちょっと恥ずかしいけど、何かを慈しむとかそういうことがないある種のもの、もうつくれなくなっているというような実感がある。やはり何万人の人が亡くなっていますから、それをやはり背負っていかないといけない。その時に近代合理主義だけでは絶対に解決できない問題が出てきます。こういうことは、おそらくここ3~5年先くらいまでしか言えないことだと思います。きっとまたみんな忘れて合理的なことだけを言うようになると思います。だいたい今までの歴史がそうだったから。でも言える間は精一杯言っていこうというのが今の僕のスタンスです。

大倉富美雄 お聞きしたいなと思ったことはバウハウスのことです。バウハウス自身がどういうふうでどうなってということはそれなりに知っているつもりなん

careful because if we are not, we may repeat the same mistakes. So we need to remember what we did in the past."

AUDIENCE: It sounds interesting that you have built the Hiroshima House in the temple compound in Cambodia, and now you are planning to attract overseas Chinese investment to build a temple of a Chinese religion in Kesenuma. I am also interested in your plan to incorporate spaces for prayer, shrines and temples in the city design for Kesenuma. In these spaces, there would be trees and flowers, and calm spaces for individuals to be alone to think. Talking about religion is not often welcomed in Japan, but as many people have died in the affected area, people must face death. I cannot help but think that the past city plans have excluded things related to death. So, I would like to ask you why you are going to bring a Chinese temple to Kesenuma.

ISHIYAMA: Unfortunately it is only after an incident like this, when we have lost so many people at once, we can speak about "prayer" in design. We, at least, I was educated not to design a monumental structure with religious significance. But after more than twenty thousand people died, I should make something to mourn them and remember them.

Fumio OKURA (floor): You mentioned that we should reconsider Bauhaus.

ISHIYAMA: Modern design, as I see it, is not an intrinsic design style, but we acquire the style through education. Early modern design by Bauhaus was the source of design for mass production and consumption. Therefore, there must be an opposing design movement or a concept that checks the trend. When teaching my students, I found that I needed to devise a method to teach

ですけれども、バウハウスはそれなりに人の歴史の証人ではあったという、終わってしまったことというのかな、そういう認識でした。それからヨーロッパの文化のものであるということ。その辺りでバウハウスのことは片付いちゃったというふうに思っていたんですけれども、そうじゃないバウハウスのことを検討しなきゃならないと思ったことについてもう少しおききできたらと思います。

石山 モダンデザインっていうものは教育によって得たものなんですね。おそらく皆さんもそうだと思うんですけれども、自分で内発的と言うか自分の本当の奥深くから出てきているものではないだろうと。教育でやはり学んできたもの。バウハウスの初期のモダンデザインというものは端的に言うと大量生産大量消費のデザインの元。だからそういうことを結びつけて考えていくとそれに対するアンチテーゼ、プレーキをかけるような考え方が出てこないデザインの世界というのはやっていけないんじゃないか。僕も半分教育者ですから若い人に教えざるを得ない。その時にやはり教え方の問題というのが非常に問題であって、我々の学んできたモダンデザインというのが意外と根が浅かったなというようなことも含めて再び考えていくべきだろう、というふうに思っています。

大倉 お話の部分良くわかりました。バウハウスのいわゆる大量生産大量消費というのは、バウハウスの理念にはあったけれども、それが今日的な問題になると

は思っていなかった。大量生産大量消費を実際にしたのはアメリカだった。

石山 でもバウハウス、グロピウスがつくったのはハーバード、イリノイ、マサチューセッツの枢軸ですから、アメリカはバウハウスに制覇された。その延長でドイツは上海を中心にして中国を制覇しようと思っている。

今中国は、特に建築・都市計画で考えているのは、要するに中国様式。北京のオリンピック会場というのは世界の中心だと思っていますからね、彼ら。そのデザインをどうするのだというのは激論、要するに考え抜いてやっている。そういう時に日本の本当に若い人たちが僕の世代じゃできなかった理論をつくっていかないと、対抗できないと思う。

わかりやすく言うと日本デザイン機構の始まりの栄久庵さんのものの考え方に典型的に表れていると思う。モダンデザインもあってこっちに仏教のことを言う。今更日本風デザインというのではないけど、ヨーロッパの思想などに対してブッディズムとは言わないけど東アジアということにベースをもった考え。栄久庵さんなんかがお考えになっている片一方で仏教というお考えがあって片一方で永々とモダニズムを築いてきたというような折衷を行っていく、そういう時代だと思えます。

わたなべひろこ 先ほどバウハウスのことに触れられたんですけど、私その時に先生がもっとおっしゃりたかったんじ

ないかなと思うのはクラフトとデザインの関係、それからもう一つそれを広げていくとアートとデザインという関係になってくるんじゃないかと思うんですけど、そこら辺の先生のお考えをお聞きしたいのですが。

石山 フィンランドは周りがみんな強い国だったからナショナルロマンチズムといういいナショナリズムが育った。人口もちょうど名古屋くらいの小さい適宜なスケールを持った国。僕はデザインのグローバリズムというものとは違うもう一つがあってバランスをとった方がいいだろうと思っている。それは北欧系のデザインに可能性がある。それがアーツ&クラフツ。若い時から職人みたいに図面を書くこととか全部教える。

わたなべ 私もフィンランドに学んだ一人なのでおっしゃりたかったことが良くわかります。ものづくりの中で今まで縦割りでもアートとかクラフトとかデザインというものがあるけども、これからはそれを横につなげたかたちで人間としてどう生きていくのかということを考えていかなければいけないと今考えています。そして新しい日本の次のデザインというものを考えていく時に、この問題がすごく大切なんではないかと思っていたところでした。ありがとうございました。

佐野 時間がきました。このトークサロンは引き続いて開催しますので、またぜひおいで下さい。今日はこれで終わりにします。

modern design, and while doing it, I realized that we should review what modern design is totally.

Bauhaus had a strong impact on America, and now Bauhaus intends to spread its concept to China from Shanghai as its base. Chinese people themselves are considering the development of Chinese style architecture and city planning. I expect young Japanese to develop new theories that my generation could not do. Otherwise, we cannot compete with other countries. One solution might be Ekuian-san's way of thinking. He appreciates modern design from Europe but at the same time he has Buddhist and East Asian thoughts as his base.

Hiroko WATANABE (floor): I guess you intended to mention more about the relationship between Crafts and Design, or further Art and Design.

ISHIYAMA: I consider that there should be an alternative trend to globalization in design. Scandinavian design offers great potentiality. That is the Art and Crafts movement. In Scandinavian countries, design education starts with drawings just like training craftsmen.

Watanabe: We have Art, Crafts and Design in the world of creation. I am now thinking that we should link these genres, and that we should consider what would be the best way for us to live from now on. This is an important point in drawing the future picture of Japanese design.

閉会挨拶

水野誠一 日本デザイン機構理事長, IMA代表

今、石山先生が安藤忠雄さんと一緒に気仙沼で、復興の前に鎮魂をというプロジェクトを一生懸命におやりになっているということは素晴らしいことだと思います。気仙沼はある意味で非常にローカルな所だけど、それをひっくり返すとすごくグローバルということになるのではないかと考えます。このことが今の時代にとっても大事なことだと思うのです。

地方の人たちが何かまちおこしをしたい、地域の物産をつくりたいという時に、彼らが見ているのは全て東京、そして「これは東京で売れますか」と言う。それに対し私は「東京を意識するのをやめなさい」と助言します。今はインターネットがある時代なのだから、それを使って皆さんが発信したものが世界で受信されてむしろ世界で話題になると慌てて日本に逆輸入する。そういう時代なのです。

気仙沼の漁業従事者のように世界を見て、別に日本国籍、日本船籍じゃなくても気仙沼の漁業というのは絶対に潰えることなく続けるぞというような意欲を持つということが、すごく大事なんじゃないかなという気がしました。

デザイナーでもなんでもない私がなんでこの理事長を栄久庵先生から言われて引き受けたかと言いますと、私は長年百

貨店の経営をしていたのですが、百貨店の経営者というのは、仮に100人いたとして99人は私と違うのです。99人は商売のことしか考えていない。何が売れるか、よそが売って売れるものをうちも売ろうということなのだけど、私がいた西武という会社はよそで売れているものはなるべく売らないと考えていました。同じものはよそに任せればいいじゃないかっていうことで、結局何を売るかという、文化を売りたいということを盛んに言ってきた会社でした。

さっき石山先生も言われていましたが、栄久庵先生がご自身のルーツが仏教ということもあり、モダンデザインというものをずっと追求してきている中で最後に仏教に非常に拘られるということ、文化を売るビジネスを考えていた私にはすごいことだと思えました。そういう栄久庵先生のお手伝いならやります、ということで理事長をお引き受けした次第です。

和洋折衷という話を石山先生がされま

したが、日本人が和洋折衷を好きなのか嫌いなのかは良くわからないのですが、明治の頃の和洋折衷、和室に椅子とテーブルを置いて会談をするというようなことは、あれほど恥ずかしいものはないという方もいますが、私はそうでなく和洋の区別もない現代の方がよくわからない。20世紀に、今私たちが住んでいる世界どこでも同じという均質な文明が全てを覆いつくしてしまった。それに比べれば明治の和洋折衷や和魂洋才という概念の方が、まだ分かりやすいと思います。

この20世紀、文明がこれほど進化した100年間というものはない。その文明を使って人間がこれほど愚かなことをやり続けた100年というものはない。例えばエネルギー資源を悉く消費してしまう。それから環境問題。これらを含めて「100年の愚行」と私は言うのですが、この100年間というのはものすごく文明が進化し、その反面、伝統や生活文化の衰退がこれまたすごい勢いで進行してしまった。その末に3.11が起きた。その問題を解決していくためには、やはりもう一度「文化の力」というものを本当に考えなければいけないのではないかな。このことを日本デザイン機構の活動のテーマとし、同時に「ボイスオブデザイン・トークサロン」のテーマとしていきたいと考えております。そのままに口火を切る第一弾として、今日の石山先生のお話は本当に素晴らしかったと思います。

水野誠一 JD理事長 / Seiichi Mizuno JD director general

Closing Remarks

Seiichi MIZUNO, JD director general, IMA president

It is very encouraging that Prof. Ishiyama is devotedly engaged together with Tadao Ando in the project for the repose of victims of the Great East Japan Earthquake in Kesennuma, Miyagi prefecture before beginning a project for rehabilitation. Kesennuma is a local town with a large fishing port. Those who are involved in fisheries have a global view and the strong will to maintain their fisheries. For this purpose, it is important that they accept fish catch even from ships with foreign nationalities.

The 20th century witnessed the most rapid progress of civilization. It was also a century in which humans made use of their advanced civilization in unwise ways, exhausting energy and causing environmental problems, for example. I name it "a century of

imbecilic behavior." Civilization advanced and homogenous civilization prevails all over the world. In contrast, culture declined rapidly during the century. The Great Earthquake occurred in this environment. To solve the problems of post-earthquake rehabilitation, we should reconsider the power of culture. I would like to propose that this be the theme for the activities of the Japan Institute of Design, and the theme for "Voice of Design Talk Salon."

参加者からの寄稿

トークサロンに参加された方々より、後日、感想をご寄稿いただきました。ご協力いただいた皆さまにお礼申し上げます。

近代を超える道筋

この度の石山先生の講演は、私にとって近代以降の社会システムの中での建築や都市というものをこれからどう乗り越えるか、ということに対するヒントの宝庫でありました。

紹介されたプロジェクトのすべてが時間や空間のスケール、さらには死や祈りといったモダニズムが排除してきた想念など、様々な角度からその枠を超え、問い直すものだったと思います。

時間のスケールという点では、ボランティアが10年間レンガを積んでつくりあげたカンボジアのひろしまハウスが、そのスケールを大きく超えており、通常完成してからその目的に合った機能を発揮する建築というものが、ここでは建築自体をつくるプロセスと、歴史の記憶を残すという目的が一続きとなり、設計から工事までが高度に専門化、効率化されることによる、つくることと使うことの分断がありませんでした。

このようなプロセスは理想として語られることは多いと思いますが、それを本当に実現してしまったことは驚きであり、大きな可能性を示していると思います。

また気仙沼の安波山をはじめとする植木、植栽に関するプロジェクトでは、人間の生活が本当は何の上に成り立っている

か、ということが問いかけられていたと思います。

緑を都市や集落のインフラとすることで、人間の生活は、交通、物流といった近代以降の都市において骨格となるものの上にあるのではなく、木や花、生物といったものの上に成り立っているのだということが示されていました。

都市の中に、必要な機能の一要素として緑が配置されるのではなく、様々な木や花、生物の営みの上に人間の生活があるという、これも近代の都市という考え方を根底からひっくり返すものです。

私も今回の震災を通じたせいなのか、これはかなりのリアリティーをもって感じる事ができました。

さらに、世田谷区でのクリーンエネルギーに関する話では、ソーラーセルと、メーカーが市場に出している太陽光パネルのコスト差の話を通じて、なにかをデザインをする上で流通を含めたものの値段を知ることの重要性と、大量消費社会では様々なことが複雑にブラックボックス化し人間の生活から消費以外のものを遠ざけてしまっていることの問題が語られましたが、石山先生が今回示されたプロジェクトの数々は、このブラックボックスを一つひとつオープンにし、苦しいが時間をかけて、プロセスや記憶を共有することが、様々なものをより人間の生活に近づけるのだということを表していたと思います。

そしてそのことが困難に面した時も自立してそれに立ち向かえる、社会をつくるのだという石山先生のメッセージとして私は受け取りました。

これをオープンにするということは、今

の設計という職能自体を否定することにもつながりますが、今回の講演の中では、建築家（でなくてもいいのですが）の新たな役割像ということに関しても多くの示唆が含まれていたと思います。

建築に限らず現状への無力感が漂う中で、実は様々なところに可能性があるということが示された2時間でした。

（神津好英 神津好英建築設計事務所 代表）

はためく大漁旗のように

～気仙沼復興プランに期待する事～

「北海道に寄るけど魚送るか～？」

ロシアと日本の国境あたりにいるらしい気仙沼の漁労長より衛星電話。

「いるいる～！」

となると、仕事をほかし事務所は宴会モード。思いついた人に片っ端からお声がけ。届いたその日は深夜まで盛り上がりません。

漁労長との出会いは、気仙沼漁港近くのホルモン屋。

6年前、仙台に行ったついでに足を伸ばした気仙沼。気仙沼と言えばフカヒレかと、フカヒレのコース料理の食べられる宿を紹介してもらったが今ひとつ。口直しにと、散歩の際に気になっていたホルモン屋。ここが出会いの場所でした。

閉店間際の店内には、頭にタオルを巻く漁師っばいおやじさん、そして、なんとカウンターには、わたしが昔デザインした木工筐体の店舗用コイン電話機が鎮座。

「うわー、これ、なんでここにあんの？これ、あたしがデザインしたんだよ～」

西日本限定販売商品がこの東北の地にあり不思議。そして、そんな縁に導かれたの

Comments from Audience

The Way Beyond Modernism

As vessels for economic activity, modern buildings are destined to be finished, from the selection of the construction site to the completion of the structure, within a certain time frame. The Hiroshima House in Cambodia, built by volunteers laying bricks for ten years, has been completed in a period extending well beyond the usual time frame. Usually, a building begins to perform its intended function upon completion. In the case of the Hiroshima House, however, the process of construction and the purpose of the building to keep a historic memory were integrated. Here, the process of designing and building the House and its use were not separated. It is often said that such a process is an ideal method of construction, but it is amazing that it really happened with this project. It showed great potentiality for future architectural

projects.

From the greening project of Mt. Anba in Kesenuma, I sensed that a question was posed as to on what people's life is based. Ishiyama showed his answer by making greenery the infrastructure of the new Kesenuma town.

Projects that lay outside the framework of modernism were shown today, and I felt that by sharing the processes and memories of these projects with related people, the projects, be it the construction of a building, road or monument, would become more familiar to people's life.

(Koei KOZU, Kozu Koei Architect Office)

Like Flapping Fishing Boat Flags - Expectations toward the Kesenuma Rehabilitation Plan

"I will drop in Hokkaido, shall I send you some fish?" I had a satellite telephone call from my friend, the chief fisherman of a

か〜?と驚きで思わずでた言葉。これが口火となり皆で飲み始めました。

漁師風のおやじは、やっぱり漁師で気仙沼の漁労長。翌朝出航とのこと。

「出航してみた事あるか?」

「ないなあ。」

「いーぞお、出航は。ねーちゃんみたいな仕事はいもん見ておかねえとな。」素敵な物言いに感動し、いくいく、と二つ返事。大いに盛り上がりました。

が、翌朝は結構な二日酔い。出航も間近。吐き気をこらえ港へ走り、もう走れん。どっかにタクシーないか〜?と思い始めた頃、ようやく前方に大漁旗をはためかせる大きな漁船とたくさんの人々のにぎわいを見つけました。群れに混じり、操舵室にいる漁労長を発見するも、女は船には乗れません。

「漁労長〜!」と大きく手を振ると船から降りてきてくれました。

「おお、きてくれたんか。行ってくるよ。」

その一言で、吐き気も吹っ飛び、なんだかすっきり港で待つ女の気持ち。

「気をつけて行ってらっしゃい!」

心からの言葉です。

今でも脳裏に焼き付く光景。海と大島を背景にはためく大漁旗、人々の動き、海鳥、そこで生まれるサウンド。

まるで祭りのよう。

「これだからやめられねえ。」と聞こえてくるよう。

見送る人、見送られる人の意気を感じ、言葉のいらぬ絆のようなものが垣間見え深く感動しました。

こうして感動の光景を胸に焼き付けた東京の女は、衛星電話を楽しみに待つようになりました。

あの光景を思い出し、仲間とともに楽しい宴を執り行う。私なりの絆の体現だと思います。

3.11以降、自身の様々な基準が変わりました。

これまでのモノ作りへのこだわり。大切だと思うのだけれど大きく俯瞰してみると全て無意味に感じます。そして、破壊された気仙沼港の前に出航の光景を思い出しました。

どうなっちゃうのだろう?もとの形に?それとも新たに生まれ変わるのか?

このところ見かける、これを機に!というような建築家のエゴ的な復興プランに、自分がデザインの際に宣ってきた言葉の数々が重なります。

そんな中、石山氏の自力建設をさせたり、祭りをやられたりのプロセスに、ああ、建築にこういうアプローチもありなのだな?と感銘。絆が生み出す光景こそが、人の心に強く訴えかけることができる。と気仙沼の設計プランに期待してトークサロンに参加致しました。

鎮魂の表現等、設計プランについては、いまひとつ頷けなかったのですが、プレゼン上手がうさん臭くてしょうがない今日この頃、言葉不足なこの計画こそ、人の気持ちとともに歩むものでは?と、後日改めて拝見、復興応援というスタンスと、氏ご自身、この計画にどっぷりと向き合っていく覚悟が感じられました。

美しい光景(デザイン)は、人に何か訴える力があります。癒しであったり、エネルギーをもらえたり、逆に恐怖を与えたり。でもその結果は、プロセスの踏みかたも大きく影響するように思います。

漁労長との出会いから学び、石山氏の作

品で確認したことです。

3.11は忘れない。でも、意気揚々と出航する気持ちを後押ししてくれるような、光景が復活するように。

自身も、今後、そんなモノ作りが出来ればいいな、と思います。

(直江由紀子 プロダクトデザイナー)

神の力を呼び込む。気仙沼の復興計画

昨年3月11日の夜、津波にのまれ途方もない火災に見舞われる気仙沼の映像をテレビ画面に見ながら「石山さんはどんな思いで見えておられるだろうか」という考えがよぎった。建築家、石山修武さんと気仙沼との関係が長くて深いことをおぼろげに知っていたからだ。まちづくりに関係する長い往来、リアス・アーク美術館、世田谷の自邸を気仙沼の船大工を呼び寄せてつくりあげたこと…。

津波は、東北から関東にかけての長い海岸線の沿岸部に壊滅的な被害をもたらした。ただし、被災から約1年を経て、復旧・復興への足取りが鈍いのは誰の目にも明らかだ。国や地方行政の明確なビジョンや予算の裏付けがはっきりとしないなか、在野ではまちづくりや建築家などの専門家がボランティアとして入り込んで地域住民に寄り添った計画づくりもゆっくりとであるが、あちこちで進められている。

石山さんはどうであろうか。気仙沼で長年培った人脈を手がかりに、意欲的に乗り込んでおられるという。旧知の中国出身で台湾・中国本土で活躍する建築家、李祖原さんを引き連れ、夏の終わりに気仙沼を訪られた。台湾では台北101をはじめとした超高層ビルを数々設計し、中国でも巨大建築を次々と実現する大物建築家だ。

fishing vessel, from far north, somewhere near the border between Russia and Japan. My reply was, "Of course!" Then, I began preparation for a party in my office.

I came to know this chief fisherman at an eatery serving char-broiled organ meat near Kesenuma fishing port. On its counter was a pay telephone for shops with a wooden case that I designed decades ago. "Wow, I designed this telephone box!" With this cry, I joined people there to drink. One of them was the chief fisherman who was going to put out the next day. He suggested that I should watch the scene of the ship's departure. It was an impressive scene. Flags wishing for a large catch were flapping against the blue sea and the sky. People were moving around rapidly, and sea birds were flying about. The sounds created in the scene were like a festival. After March 11, my concept for designing has changed. Prof. Ishiyama's approach to help people construct something

themselves or organize a festival themselves opened my eyes. I also felt his strong determination in implementing the plan for repose of the affected people in Kesenuma.

Beautiful designs are appealing to people. They may give them a sense of healing, vital strength or even fear. It appears to depend on what process has been taken to attain such results.

I learned this from the chief fisherman and confirmed it through the works by Ishiyama.

I will not forget March 11, 2011 and wish that the scene of a departure of a fishing boat with highly spirited fishermen on board might be seen again soon.

(Yukiko NAOYE, product designer)

Beyond Modernism and its Framework

The March 2011 earthquake posed the weaknesses and limits of the scientific planning theory that "we cannot work without defining

石山さんと李さんの示した計画は壮大なものだ。媽祖を祭る寺院をつくらうという提案だ。媽祖とは中国・台湾における航海・漁業の守護神として絶大な信仰を集める神様だ。これを祭る寺院と、それを取り巻く施設を全長5kmにわたって整備するプロジェクトだという。気仙沼は遠洋漁業の拠点で海神とはなじみ深い。海を介したコスモポリタニズムの遺伝子を持つ気仙沼には、ピッタリなのだという。

面食らう地元有力者たちの顔が目浮かぶようだ。元気のある中国・台湾からの投資を呼び込み、ゆくゆくは多くの中国人、台湾人が気仙沼を訪れることを目論む。そして、気仙沼を世界的魚食都市へ仕立てあげようという計画だ。

媽祖と気仙沼の海神の合祀祭が、石山さん、李さん、そして気仙沼の人々との間で考えられることになった。「考える、動く、建築が変わる」という石山さんの著書があるが、石山さんは壊滅の被害を受けた気仙沼を前に呆然としつつも「動く」ことをもって、この難事に、困難に立ち向かおうとされているように思われる。神も「動く」ことで助けの手を差し伸べてくるという心意気だろうか。気仙沼の人々と石山さん、李さんの奮闘は続いているという。甚大な被害を被った気仙沼は、この気宇壮大なプロジェクトを受け入れ、復興の道を歩みはじめるのだろうか。石山さんの並み外れた「動き」に感じ入るとともに、翻ってわたしたち自身に何ができるのか、行動がそれぞれに問われているのだと感じた。
(村島正彦 studio harappa 代表)

近代とその囲いを超えて

今回の震災は、従来の環境計画、その背

景としての「科学」や「環境観／計画論」そのものが孕んでいた本質的な問題を明らかにした。たとえば、津波に耐えるはずだった堤防を「想定をはるかに超えた高さ」とエネルギーをもった津波が、やすやすと超えていった光景は、「想定ナシには作業ができない」という、科学的計画論の限界と弱さを、私たちに突きつけた。

この場合の「想定」とは、諸条件の「囲み込み」であり、モダンデザインも含めた近代文明は、この「囲み込み」のシステムによって進歩・発展してきた。そして、科学や芸術と同様に、デザインという営みもまた諸分野に細分化してきたことを、私たちは既にいろいろな形で反省している。

そうしたなか、ホロデザインの名のもとに「非常識から超常識のデザインへ」という流れを推進しているJDとしては、その目指すところの一部を、今回のトークサロンを通じて、分かりやすく発信することができたと思う。

世界中から集まったボランティアの人たちとの、10年間に及ぶ協働作業によるカンボジアでの「ひろしまハウス」から、気仙沼での鎮魂のデザイン。そのための「建造物」ではなく「山の植栽」。櫻の並木づくりと、そこでの地元の植木屋さんからの学びに至るまで、アジア各地でのディープな現場体験と「常識」には左右されない逞しい感性と思考に支えられた石山さんの講演は、「囲い込まれない建築家」の仕事のしかた、さらには「囲い込まれない個人」の生き方を知るという意味でも、素晴らしいものだった。

石山さんは、カンボジアでの「祈りのデザイン」において、モダンデザインがいかに意味をもたないかを語った。同じ講演の

最後で、バウハウス大学誕生の時から隣にありながら、先生たちが学生に教えることのないバウハウスの創始者たちが眠る墓地について言及し、グロピウスによるモニュメントの写真を紹介した。それは、バウハウスとそのメンバーたちもまた、自分たちの活動を「モダンデザインの創始」というミッションに合わせ、うまく囲い込みながら展開したこと、それによって取り残されてきた大切な部分があるということ、見事に示唆していた。

聴衆一人ひとりが、建築やデザインの本質に立ち返りながら、自分自身がこれから何をすべきかを考えさせられる、その内容をこれまでの常識にとらわれることなく行動に移す勇気をもらえる、刺激的で幸せなひとときだった。

講演会の数日後、三陸海岸の景勝地、碓氷海岸に「雷岩」を訪ねた。環境省による「残したい日本の音風景」にも選定され、同省サイトに「打ち寄せる波を切り裂く、足がすくむような轟音」を立てると紹介されているその巨石は、大津波に襲われた後、見た目は全く変わらないのに、その声を失っていた。

その風景のなかで、音よりもむしろ静寂が、ときに大きな意味をもつことを実感した。と同時に「モノの形」よりも「形を超えた風景の内実」を大切に建築家、石山さんの講演会のことを思い出さずにはいられなかった。
(鳥越けい子 サウンドスケープ研究&実践家)

the scope of the assumption." The "assumption" in this case means "enclosing" various conditions. Modern civilization including modern design has developed with this "enclosing" system. Ishiyama-san introduced his project "Hiroshima House" in Cambodia which was completed ten years after laying the foundation through the collaboration of volunteers from different parts of the world, and his plan in Kesenuma for the repose of victims of the earthquake. Both show how Ishiyama works as an architect who is not enclosed by predetermined conditions and further how he lives as an individual not to be enclosed by them. He referred to the cemetery next to the Bauhaus institution where the founding members of Bauhaus rested and the existence of which had never been taught to students. He showed the photo of the monument by Gropius. The Bauhaus members were "enclosed" by the mission as the founders of modern design in their activities, yet, these photos laudably implied that there were important

elements which were left out of the enclosure. Several days after the Talk Show, I visited the "Kaminari Iwa" (Thunder Rock) at scenic Goishi Beach along the Sanriku Coast. The rock is selected as a "soundscape to be cherished for long" by the Ministry of the Environment. After the tsunami, the rock retained its shape as before, but the roaring sound created by the rolling surf was lost. In the scene, I realized that silence sometimes has greater meaning than sounds.

(Keiko TORIGOE, soundscape researcher and practitioner)

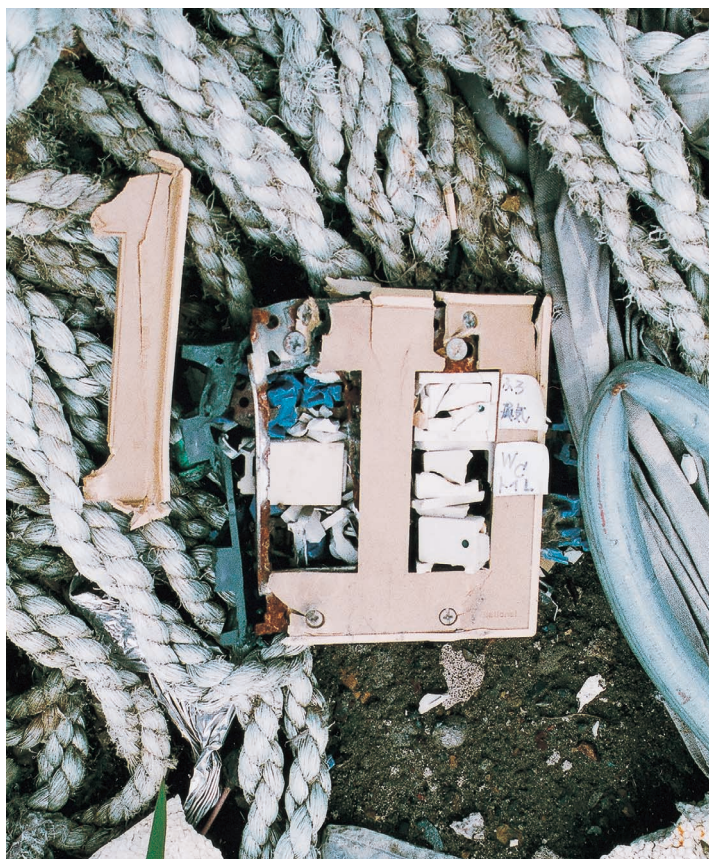


津波現場・150日後

上：宮城県女川町 横転した建物 地盤沈下した港で
 右：宮城県南三陸町 家庭用スイッチ盤 風呂・換気・WC・トイレの文字が
 (2011年8月 撮影 佐野邦雄)

150 days after the tsunami

Above: Overturned building at the subsidence port in Onagawacho, Miyagi prefecture
 Right: Switch board for household use Letters of Bathroom, Ventilator, Toilet can be seen (photo by Kunio Sano, August 2011)



3.11が教えてくれたこと

櫻井広行 ゆりあげ港朝市協同組合代表理事

誰一人、町の人間でこの津波がこれほど悲惨なものになるとは思っていなかった。

犠牲となった消防団16名、警察官6名、市会議員2名が最後まで避難誘導をしていたことから明白である。

名取市の防災無線は、市庁舎屋上にある発信機のヒューズが壊れ、閑上の街には危険を知らせる声は届かなかった。これまで、毎年2回地震や津波を想定し、避難訓練が行われていた。しかし、その訓練は、何の役にもたたなかった。訓練は全て、徒歩で避難することを目的に実施されていたが、震災当日、ほとんどの人々は、自家用車で逃げていた。無論、あれだけの地震と、加えて、津波警報が発令されたらあっては当然である。

多くの人々の向った先は、訓練で何度も訪れ、そして、避難場所として指定さ



津波に襲われた宮城県名取市閑上（2011年7月16日 撮影 南條あゆみ） / After tsunami at Yuriage, Natori city, Miyagi prefecture (July 16, 2011, photo by Ayumi Nanjo)

れていた公民館と中学校であった。それは、決して間違いではない。

しかし、そこは、避難をしようとする人の車によって、大渋滞が発生してしまっており、身動きもとれない状態に陥っていた。そして、間もなく、その渋滞に大津波が押し寄せ、残念なことにその多くの人々は命を落としてしまった。

一方、ほかの2本の道路は、渋滞など縁遠い、いたって普通の光景であった。この道路を使った人は、皮肉なことに遅く避難した方であって、この道路を利用し、西側へ逃げた人々は、ほとんどが助かっている。

消防署と消防団の連絡が途絶え、現場の判断が全てを決めた午後3時30分、二階建ての公民館から三階建ての中学校へ移動命令が出され、300mしか離れていない道路をゆっくりと歩いていた約250名の人たちが一瞬にして、瓦礫の津波に飲み込まれてしまった。

今までの街で、この日に備えていたかは、甚だ疑問であるが、全ての訓練、演習、会議が意味の無いものだったことを津波は、我々の頭に鉄杭を振り下ろした如く教えてくれた。

機能しない組織であることに誰も気づかない

3月12日に避難所が解放されたが、名

取市の職員の対応は人間性を欠如したものであった。震災から一週間後、避難所では基本的食料程度は確保する事ができたが、被災していない街中は、買い物難民で溢れていた。賞味期限が過ぎたパンが次々と避難所裏でゴミ袋に入れられていく。避難所間の横のつながりで相互に融通しあう仕組みは最後までつくられることはなかった。避難所間で食料の量、種類、質の差は非常に大きかった。

日本全国で勝手連のボランティアが立ち上がり、支援物資を独自に調達したが、ほとんどの自治体が受け入れを拒否した。現地で活動しようとしたボランティアについても、どういう必要があるか調査もしない自治体に簡単に拒否された。

特に東北人の気質で気軽に他人に援助を頼めない人が多く、疲労で倒れる老人が後を絶たなかった。

仮設住宅は、岩手を除いて宮城、福島は防寒対策が施されていないかった。

これは、ほんの小さなことでも自分で判断、決断できる職員がいないことを証明した。

今後の対策

震災対策は、自治体が主導ではなく住民が主体的に自治体と一緒に訓練、避難場所、連絡方法、バックアップシステムを構築していく必要がある。

なぜなら、行政は自分たちが描いた案件を予算どおり執行するだけであり、住民に対してはお茶濁し程度に落とすところを探る程度であるし、原発の問題も根

Contribution

What March 11 Earthquake Taught Us

Hiroyuki SAKURAI, representative director of Yuriage Port Morning Market Cooperatives

Nobody in my town imagined that the tsunami would be as disastrous as it was. We had regular evacuation drills twice a year in preparation for possible earthquakes and tsunami. They did not help at all. In these drills, people have been supposed to walk to the Community Center and a junior high school, both designated evacuation centers. But on the actual day of the earthquake, almost all of the townspeople tried to evacuate by car. Roads leading to these evacuation centers were jammed, and cars were unable to move when the tsunami wave surged and carried away the cars with many people inside. Ironically, two other roads not

leading to the designated evacuation centers were empty. Those who headed toward the west using these roads were mostly saved. The March 11 tsunami has taught us that the meetings, drills and exercises we had undertaken were all meaningless.

* Lack of functional organization

One week after the earthquake, all basic food was distributed to our evacuation center, and even breads after freshness dates were thrown away into garbage bags. Towns not affected by tsunami were crowded with people who went shopping. Unfortunately, there was no system established to adjust what food items and necessities were available between evacuation centers. Across the country, volunteers organized relief groups and carried food and other necessary goods to local government offices in the affected area, but many offices refused to accept them. There



本的には同じ構造である。

行政が予想を上回る事態に関しては、お咎めなしであり、犠牲者は一般住民であることを忘れてはいけない。

食品の買い物をしたことがない職員が配給責任者になり、避難所の現場も回らない現状が実際におきているので、避難所の管理、食品、その他支援物質の受け入れ分配、ボランティアの受け入れ配置は、全て民間のメンバーを事前に決めて、市の職員がそれをサポートしたり、監視したりする仕組みが特に今後、地震、津波の起きるといわれている地域にとっては、緊急を要する課題である。

地域の組織を変える

東北地方では、行政と住民の連絡機能として町内会や自治会があり、行政より少ない予算の提供と会費でやっているほ

とんどの長は、現役を引退した人たちである。若者がこの町内活動に参加しない大きい理由はここにある。町内会、自治会の役員を30～50代の現役世代に変えていくことが肝要である。現役を引退した方々には、サイドからサポートする体制に移行すれば有機的な組織に変わり、住民の安全に関することについて、すばやく対応でき行政など各種団体に対する働きかけを主体的にできるはずである。そのためにも、街の中に老若男女が気軽に集うことのできる街カフェを作る必要がある。コミュニティは大事だと思うが、その場とその雰囲気を作ることが必要で

ある。

最後に二年ほど前、市民全員に懐中電灯、ヘルメット等避難用具が全戸に町内会を通じて配布されたが、避難所に持ってきた住民は一人もいなかった。

櫻井広行 (さくらい ひろゆき)

1954年宮城県生まれ。1977年早稲田大学商学部卒業。1997年株式会社さくらい水産 代表取締役就任2000年よりあげ港朝市協同組合 代表理事就任、現在に至る。平成23年3月11日の東日本大震災から約2週間後、買い物難民となった被災者を助けるため自己の再建は差し置き、名取市の中心部でゆりあげ港朝市を再開させた。その後も、お客様の「続けてくれ」「がんばってくれ」との温かい言葉に後押しされ、現在も地元企業の協力の下、毎週日曜日にゆりあげ港朝市を続けている。

were some local government offices which did not try to determine whether there were needs for volunteers, and they simply turned down offers to help made by volunteers. Except for Iwate prefecture, temporary houses in Miyagi and Fukushima prefectures were not equipped with the means to protect the residents from coldness. These facts show that there is a serious lack of government officers who are able to understand emergency and disaster situations and to make decisions on simple matters.

* For the future

People should become the main players in disaster prevention and relief activities, from evacuation drills, evacuation center management and to communication between people and local government officers. Local governments should establish support systems. Members among local residents should be appointed to

be responsible to manage an evacuation center, to accept, store and distribute food and other relief materials, and to accept volunteers and assign them jobs. Local government officers should work to support and coordinate their work.

* Reorganization of community organizations

Townpeople associations work as a liaison between people and the local governments. The leaders of townpeople associations are mostly retired people. It is clear that leaders of these associations should be composed of people between those in their 30s and 50s. If elderly people support these younger leaders, these associations will function more organically. In order to facilitate better communication among people of different ages, there should be a "town café" where people can sit and talk freely.

事務局から

理事会開催

2011年12月1日にNHK青山荘（青山）で2011年度理事会を開催し、2011年度上半期の活動報告、および、本年度未までのテーマを検討した。

上半期の活動報告では、6月14日に開催した「Voice of Design フォーラム・新エネルギー社会のデザイン」（講師：環境エネルギー政策研究所長飯田哲也氏）、11月17日に開催した「Voice of Design トークサロン・石山修武さんと2時間」（講師：早稲田大学教授・JD理事石山修武氏）があった。新企画のトークサロンに関しては、年4回程度のペースで開催するなどが検討された。

また、『クルマ社会のリ・デザイン』の刊行から7年が経過しさまざまな状況が変化するなかで、新たなクルマ社会を考える必要があるとし、出版事業の構想が提案された。その他にフェイスブックの活用などが提起された。

メタボリズム展開催

2011年9月17日から2012年1月15日まで、森美術館（六本木）にて「メタボリズムの未来都市展 - 戦後日本・今甦る復興の夢とビジョン」が開催された。「メタボリズム」とは「新陳代謝」を意味し、「生物が代謝を繰り返しながら成長していくように建築や都市も有機的に変化できるようにデザインされるべきである」という маниフェストとして1960年代に発表された日本の建築運動。栄久庵憲司会長はインダストリアルデザイナーとしてこの運動に参画した。会期中はトークイベント等に出演した。

会期中、メタボリズム運動のメンバー

の一人として活躍され、当会理事としてもご協力いただいた菊竹清訓氏が12月26日に逝去されました。生前のご厚誼を深謝して、謹んでご冥福をお祈りいたします。

栄久庵憲司会長 Lifetime Achievement Award 2011を受賞



GKデザイングループ代表でJD会長の栄久庵憲司氏が長年のデザインへの功績を讃えられ、香港デザインセンターより、Lifetime Achievement Award 2011が授与され、12月2日に香港で行われた受賞式に出席した。

受賞にあたって栄久庵会長に話を伺った。「活況を呈するアジア諸国に対して、国際社会での日本の存在感の希薄さを感じる。今こそまさにその自覚が必要で、日々の努力を重ねた先に創造性と存在感が生まれるだろう。その努力を続けるためには、アジア、世界に対して希望を持つことが大事だ。」と心境を語った。

編集後記

南相馬市鹿島区牛河内では、日本ログハウス協会の協力で34戸がログハウスで供給された。東北大学工学研究科五十嵐太郎研究室+はりゅうウッドスタジオ（芳賀沼整氏）設計の集会場には、美術家彦坂尚嘉氏の壁画が施された。集会場前には高さ8mの塔も建てられた。

横並びを求められがちなプログラムの下、集会場も含め軒並みプレハブ平屋で埋め尽くされた仮設住宅群に、精密切断された部材で構成され断熱効果も高いログハウス、屋根勾配を覆ったため周囲から一段高い壁画、緩い螺旋の形状と五七五七七のリズムで塗り分けられた「復興の塔」が仮初めの暮らしを彩る。地名などの文字を変形した壁画には鎮魂と再生の祈りが刻まれた。緊張を強いられ続ける避難者は、昼敷きの集会場でカラオケをして久々に大声を出したり、炊き出しを楽しんだりしている。

復興へのスタートは切れた。どれだけ展望を見越しながらどれだけ長く継続できるかが課題だろう。（天内大樹）

VOICE OF DESIGN VOL. 17-2

2012年3月11日発行

発行人／栄久庵憲司

編集委員／迫田幸雄（委員長）、鳥越けい子、薄井滋、天内大樹、矢後真由美、南條あゆみ（事務局）

翻訳／林 千根

発行所／日本デザイン機構事務局 〒171-0033

東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F

印刷所／株式会社高山

VOICE OF DESIGN Vol.17-2

Issued: MARCH. 11. 2012

Published by Japan Institute of Design

3-30-14 Takada, Toshima-ku, Tokyo 171-0033 Japan

Phone: 81-3-5958-2155 Fax: 81-3-5958-2156

Publisher: Kenji EKUAN

Chief Editor: Yukio SAKODA / Translator: Chine HAYASHI

Printed by Takayama inc.

From the Secretariat

Board of Directors

The meeting of the Board of Directors for FY2011 was held on Dec. 1, 2011 to review JD activities and to discuss the theme for activities until the end of the fiscal year.

Metabolism Exhibition

"Metabolism the City of the Future ? Dreams and Visions of Reconstruction in Postwar and Present Day Japan" was held at the Mori Museum, Roppongi, Tokyo from September 17, 2011 to January 15, 2012. "Metabolism" is an architectural movement launched in Japan in the 1960s. JD chairperson Kenji Ekuan took part in the movement as an industrial designer.

Lifetime Achievement Award 2011 to Chairperson Ekuan

The Lifetime Achievement Award 2011 was given to Kenji Ekuan, president of the GK Design Group and JD chairperson for his achievements in design by the Hong Kong Design Center.

Editor's Note

In a district of Kashimaku Ushikochi, Minami Soma city, Fukushima prefecture, 34 log houses were presented by the Japan Log House Association to provide provisional housing to the people displaced because of the nuclear power plant accident. The houses made of precision-cut logs with good insulation were built among the flat prefabricated tenement houses. In the plaza, the loose spiral "tower of reconstruction" was built with a pitched roof, a mural, and a painted body. The tower soothes the hearts of the displaced. In the mural designed using place names as its motif, prayers for the affected and for the rehabilitation of their community are engraved.

The reconstruction efforts have begun, the problem is how long we can continue these efforts while looking forward to the future. (Daiki Amanai)